

# 富山市内遺跡発掘調査概要 V

—水橋二杉遺跡・願海寺城跡・北代遺跡—

2003

富山市教育委員会

# 富山市内遺跡発掘調査概要V

—水橋二杉遺跡・願海寺城跡・北代遺跡—

2003

富山市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は、個人住宅建築等に伴う平成14年度富山市内遺跡の発掘調査概要報告書である。
- 2 調査は、文化庁の国庫補助事業として富山市教育委員会が実施した。
- 3 本書で報告する遺跡の名称・調査期間・調査面積は次のとおりである。

|        |                         |                   |
|--------|-------------------------|-------------------|
| 水橋二杉遺跡 | 平成14年 6月24日～平成14年 7月31日 | 179m <sup>2</sup> |
| 願海寺城跡  | 平成14年 8月 8日～平成14年 8月30日 | 90m <sup>2</sup>  |
| 北代遺跡   | 平成14年10月 1日～平成14年10月17日 | 16m <sup>2</sup>  |
- 4 調査担当者は次のとおりである。

|        |                                |
|--------|--------------------------------|
| 水橋二杉遺跡 | 安達志津・中村 栄（富山市教育委員会埋蔵文化財センター嘱託） |
| 願海寺城跡  | 古川知明（同 主任学芸員）                  |
| 北代遺跡   | 堀沢祐一（同 学芸員）                    |
- 5 調査にあたり、富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センターの指導・協力を得た。また現地調査から報告書作成に至るまでに、次の方々の指導・助言・協力を得た。記して謝意を表します。

池野正男、上原真人、浦畑奈津子、小野正敏、岡本淳一郎、加藤達行、兼子 心、  
金龍教英、久々忠義、高岡 徹、高森邦彦、滝脇秀雄、広田克昭、舟崎久雄、  
本田和裕、増川宏一、宮田進一、富山市願海寺町内会、数井齊（願海寺縦代）、  
富山市水橋二杉町内会、北代縄文広場解説ボランティアの会、株式会社日昇、  
㈲広瀬工業、株式会社栄工社、（順不同、敬称略）
- 6 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 7 願海寺城跡の自然科学的分析は木材同定、種実遺体同定を行った。木材同定は株式会社吉田生物研究所、種実遺体同定は大成エンジニアリング株式会社に委託し、その分析結果の抜粋を本書に掲載した。
- 8 願海寺城跡出土の将棋駒については遊戯史学会会長 増川宏一氏より玉稿を賜った。
- 9 願海寺城跡出土の漆器については松澤那々子氏より玉稿を賜った。
- 10 本書の執筆は、当センター職員の協力を得て古川・堀沢・安達が行い、各々の責は文末に記した。

## 目　　次

|          |    |
|----------|----|
| I 水橋二杉遺跡 | 2  |
| II 願海寺城跡 | 17 |
| III 北代遺跡 | 39 |
| 写真図版     | 41 |
| 報告書抄録    | 57 |

## 凡　　例

|    |  |       |
|----|--|-------|
| 遺物 |  | 墨痕    |
|    |  | 煤・油煙  |
|    |  | 漆付着部位 |
|    |  | 赤彩    |



第1図 調査遺跡位置図(1:100,000)

1.水橋二杉遺跡 2.順海寺城跡 3.北代遺跡



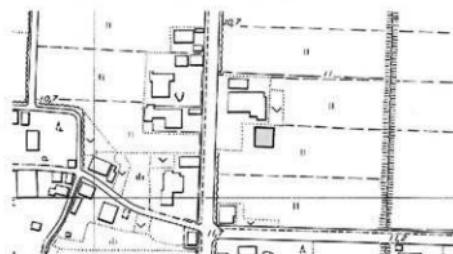
第2図 水橋二杉遺跡調査位置(1:12,000)



第3図 順海寺城跡調査位置(1:12,000)



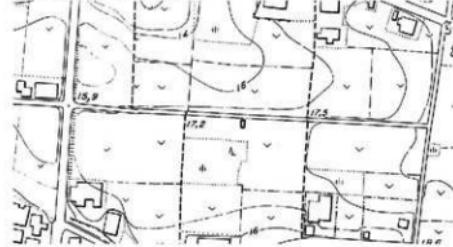
第4図 北代遺跡調査位置(1:12,000)



調査範囲(1:3,000)



調査範囲(1:3,000)



調査範囲(1:3,000)

# I 水橋二杉遺跡

## 1 遺跡の位置と環境

水橋二杉遺跡は、富山市街地の北東約6kmの常願寺川右岸に位置する縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。常願寺川と白岩川の複合扇状地上に立地し、標高は約11mを測る。

周辺をみると、新堀西、金尾新西、中野、沖遺跡などの縄文から中世にかけての遺物散布地が点在する。水橋二杉遺跡の主体である奈良・平安時代の遺跡に目をむけてみると、常願寺川右岸を約4km下った水橋荒町・辻ヶ堂遺跡は、大型の掘立柱建物や方形の区画溝などの遺構や、瓦、石帶などの遺物が見つかっており、「水橋駅家」に比定されている。本遺跡の北西2.3kmに位置する宮町遺跡は、倉庫と考えられる平安時代の掘立柱建物や石帶などが発見されている。南東3.5kmに位置する舟橋村浦田遺跡では、倉庫と考えられる8世紀後半から9世紀前半頃の掘立柱建物が区画溝に沿って整然と並んでおり、「東大寺領大蔵莊」に比定する説もある。

## 2 調査に至る経緯

遺跡は、過去において富山市教育委員会（以下、市教委という）によって6回の試掘確認調査と1回の発掘調査が実施されている。平成8年に行われた試掘調査では、遺物包含層から「君万呂」と墨書きされた須恵器の壺が出土している。また、同年の発掘調査では、奈良時代後半の並走する二つの溝、掘立柱建物跡が見つかっており、遺物では縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、中世土師器、近世陶磁器などの他、「犬」と墨書きされた須恵器壺が出土している。

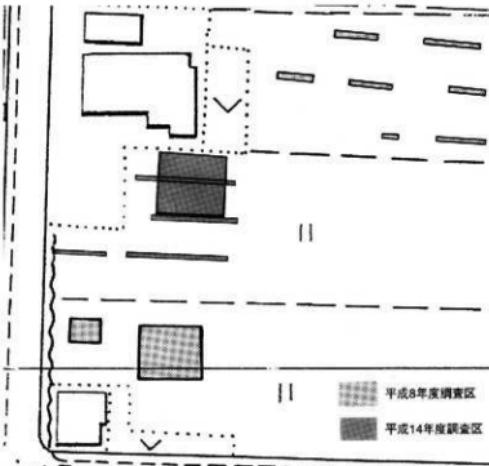
平成14年2月に二杉地内の現況水田において、個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の確認依頼が市教委に提出された。

市教委では開発区域全域が遺跡範囲にあることから、同年4月、1,000m<sup>2</sup>を調査対象として試掘確認調査を実施した。その結果、1,000m<sup>2</sup>の範囲に奈良時代を中心とした集落遺跡の所在を確認した。工事は建物部分の地盤改良を地表下7mまで行う計画であったため、その部分179m<sup>2</sup>の発掘調査が必要となり、同年6月24日から7月31日まで発掘調査を行った。

## 3 遺構と遺物

### ① 調査の概要

遺構検出面は2面を確認



第5図 調査区位置図(1:1,000、上が北)

した。上層遺構は、溝12条、倉庫跡と考えられる総柱の掘立柱建物2棟、土坑、ピットを検出した（第6図）。多くは奈良時代に属する。上層遺構の地山は下層の遺物包含層であり、ここに縄文から奈良時代の遺物を含む。下層遺構検出面においては時期不明の土坑、ピットを検出した（第8図）。

出土遺物には、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、中世土器、珠洲焼、上鍤、フイゴ羽口、砥石、近世陶磁器がある。中でも、「牛」の墨書のある須恵器や、「女」のヘラ書きのある須恵器の出土が特筆される。

#### (2)調査の方法

上層包含層の上までバックホウにより掘削し、それより下は人力で掘削した。測量は測景機器（トータルステーション）を使用し、任意の局地座標を設定した。局地座標は真北より $2^{\circ}$ 東にふれる。

#### (3)基本層序

第1層淡灰褐色土（水田耕作土）、第2層灰白色土（耕盤土）、第3層淡橙褐色土、第4層淡褐色土、第5層暗めの淡褐色土、第6層褐色土（上層遺物包含層）、第7層黒色土（下層遺物包含層）、第8層黄色シルト地山層に至る。第7層上面および第8層上面が遺構検出面である。

#### (4)上層遺構

##### 溝

**SD01**（第9図、写真図版1） 南から北に流れる溝である。方位はN-13°-E、検出長11.0m、幅0.8~1.1m、深さ0.35~0.55mを測る。覆土は褐色シルトである。南側では底面中央に中洲状に高い部分があり二筋に分かれていたようである。切り合い関係は確認できなかったため同時に存在していたと考えられる。P24、SD13、SD03、SD04より新しい。遺物は比較的多く出土しており、須恵器、土師器、内面黒色土器、土鍤がある。また、「女」とヘラ書きされた須恵器の坏が出土した。

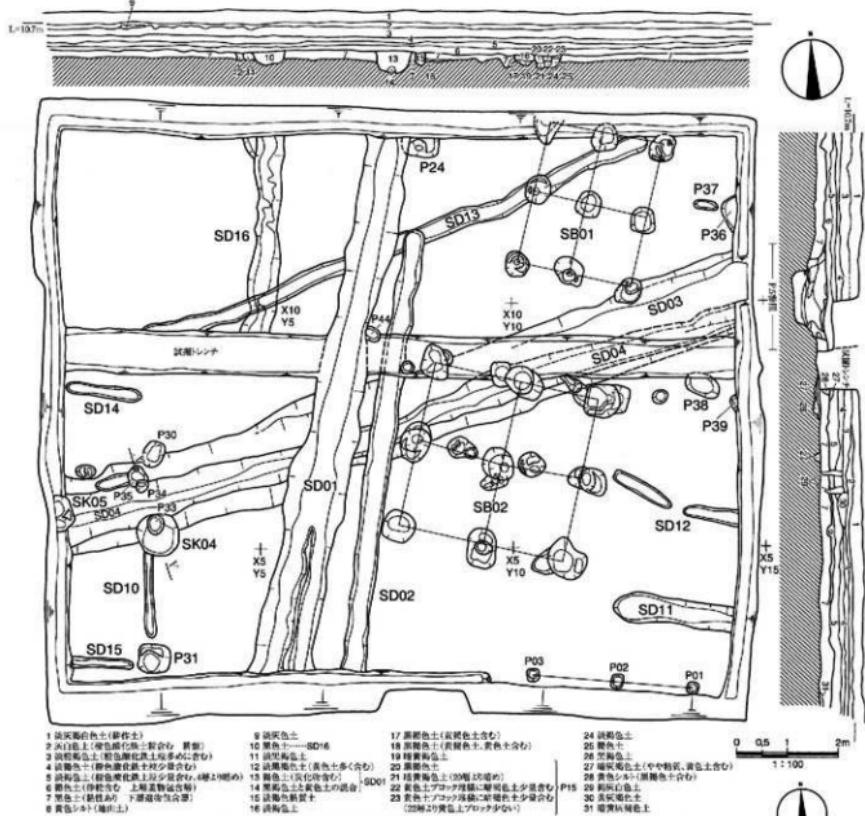
**SD02**（第9図、写真図版1） SD01の東側に並走する溝で、南から北に流れる。方位はN-10°-E、検出長9.2m、幅0.35~0.5m、深さ0.05~0.1mを測る。SD13に達したところで途切れる。土師器窯の小片がわずかに出土した。

**SD03**（第6・11図、写真図版1） 西南西-東北東方向に走る。検出長14.0m、幅1.5~1.8m、深さ0.7mを測る。覆土は上層が黄色砂質シルト、下層は白色砂であるため、試掘調査時には地山上としていた。SD01、SD02、SD04より古い。遺物はほとんど上部からの出土である。須恵器、土師器、内面黒色土器、天正山式とみられる弥生土器が出土した。

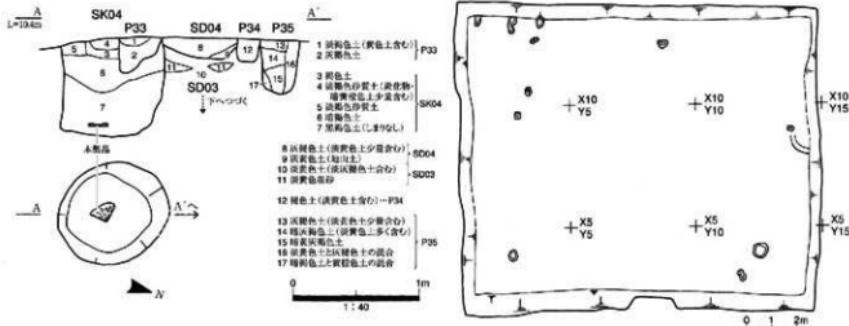
**SD04**（第6・11図） 西南西から東北東へ流れる溝で、検出長14.0m、幅0.5~1.0m、深さ0.2mを測る。SD03とは同方向でSD04が新しい。東側ではSD03の南肩に片寄る。SD03が埋まる過程で堆積した層の可能性もある。灰褐色土から灰黄色土を呈する。遺物は「牛」の則天文字が墨書きされた須恵器の坏が上面で出土した他、須恵器、土師器が出土した。

**SD11**（第6図） 西から東に流れる溝で、検出長2.35m、幅0.5~0.6m、深さ0.06~0.20mを測る。須恵器、土師器を出土した。

**SD13**（第6図） 西南西から東北東に流れる溝で、検出長11.0mを測る。幅0.3~0.35m、深さ0.2~0.9mを測る。SD01、SD02より古く、SD16より新しい。覆土は黄色砂である。

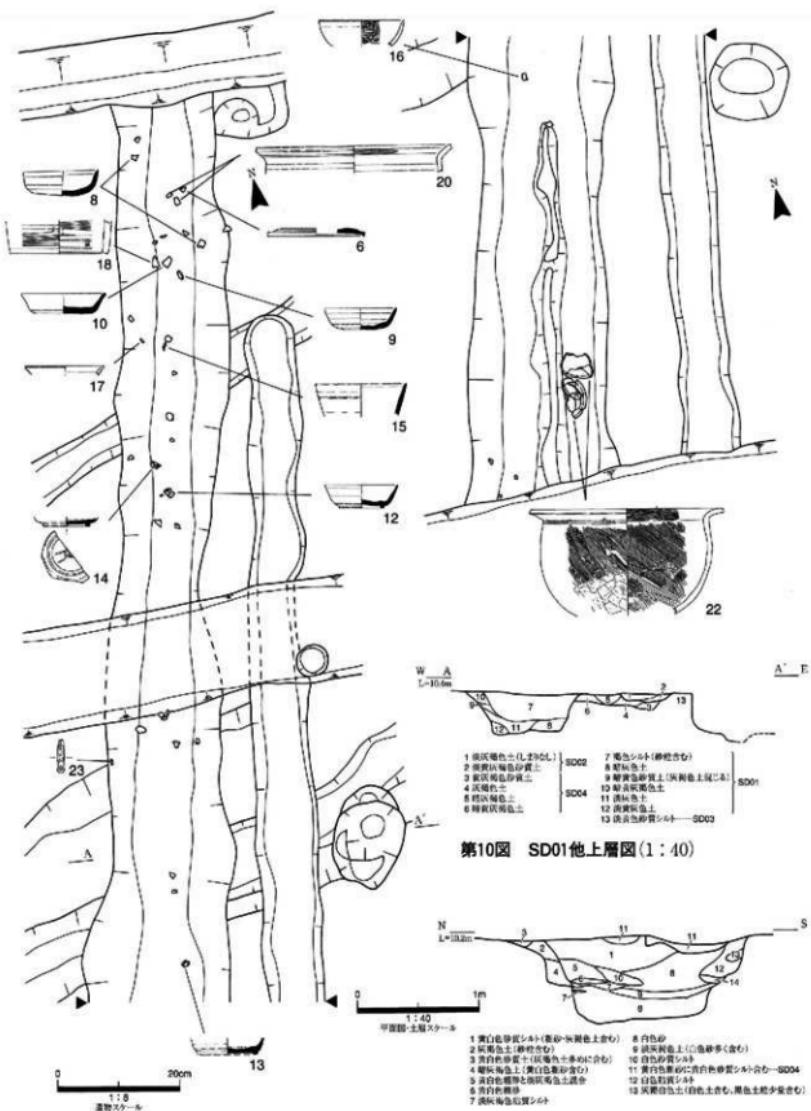


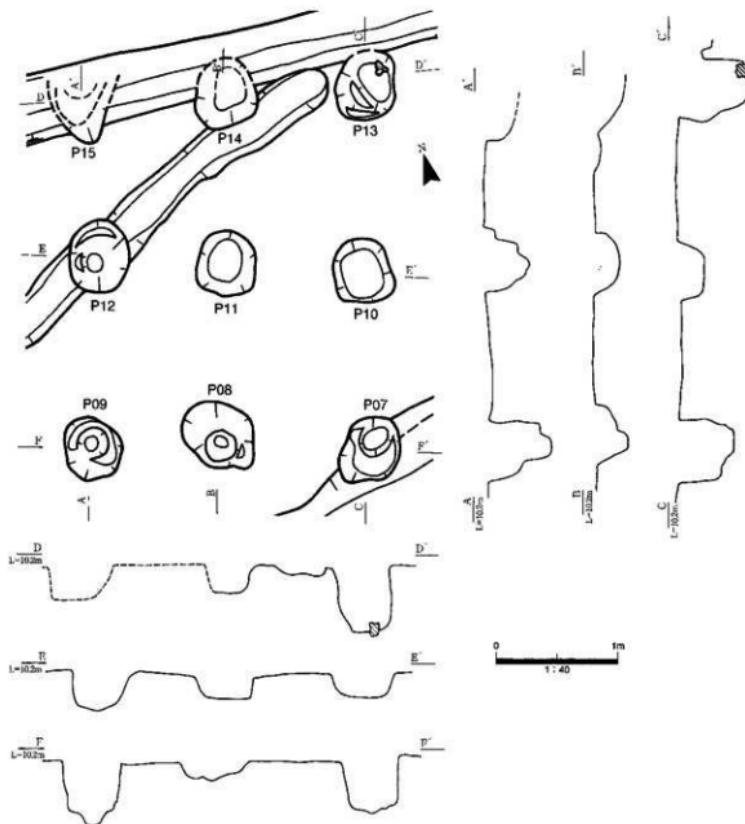
第6図 上層構造平面図及び調査区北壁・東壁土層図(1:100)



第7図 SK04 土層図・遺物出土状況図(1:40)

第8図 下層構造平面図(1:200)





第12図 SB01 エレベーション図(1:40)

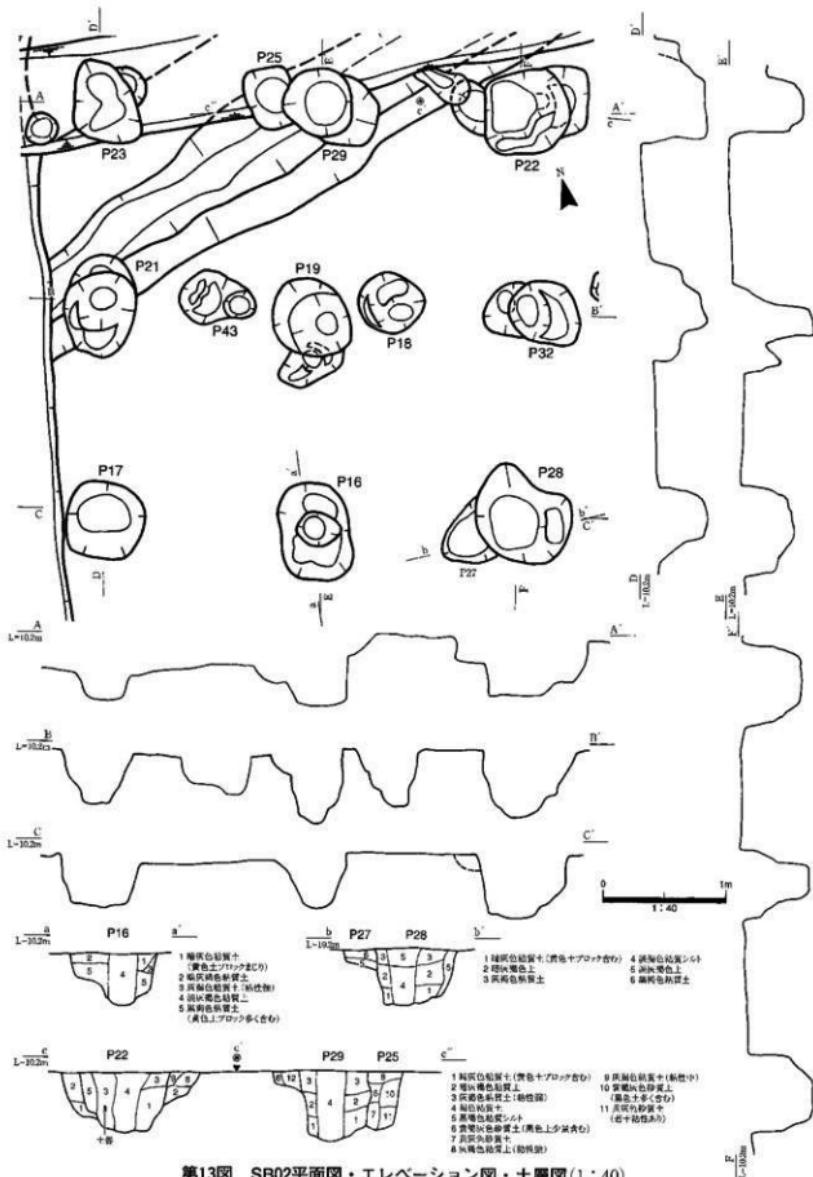
遺物の出土はない。

**SD16** (第6図) 南から北へ流れる溝で、検出長は4.0m、幅0.7m、深さ0.3mである。覆土が地山土とほぼ同じ黒色土であったため、下層面で検出した。調査区北壁上層断面で西側の土坑を上層から掘り込んでいることから上層遺構と判断した。

他に幅0.2m前後、深さ10cm前後のSD10、SD12、SD14、SD15がある。

**掘立柱建物** 2棟を検出した。

**SB01** (第12図、写真図版2) 東西2間×南北2間以上の総柱建物跡で、建物主軸はN-15°-Eである。建物規模は桁行検出分で東筋2.87m、梁行は南筋で2.31mである。柱間寸法は、桁行東筋で北から、1.52m、1.45m、梁行南筋で東から1.23m、1.08mである。



P13では柱根が遺存していた。柱掘方は直径約0.5m、深さ0.2~0.5mで隅柱柱穴が深くなる傾向がある。SD03、SD13より新しい。遺物は須恵器、土師器がある。

**SB02** (第13図、写真図版2) 東西2間×南北2間の縦柱建物跡で、建物主軸はN-13°-Eである。建物規模は東筋で3.45m、南筋で3.39mを測り、ほぼ正方形である。柱間寸法は、東筋で北から1.73m、1.72m、南筋で東から1.66m、1.73mである。柱掘方はおよそ直径が0.6~0.8m、深さ0.5mで、SB01に比べ柱間寸法、柱穴規模ともに大型である。一回以上の改替えをしており、P18、P43は床の補修のための柱跡である可能性がある。SD03、SD04より新しい。遺物は須恵器、土師器があり、墨痕のある須恵器坏が出土した。

両掘立柱建物跡とも、主軸方向はほぼ同じで、SD01とともに同一の主軸方向である。また、第6層を掘り下げた際に、柱根が腐食し空洞となっていたため、筒状に抜けてしまう柱穴が多くあった(図版2)。これにより近似した色を呈する第7層において、柱穴掘り方を検出することができた。

調査区西端に一列に並ぶ3基の小型柱穴状ピットが存在しており建物跡と推定される。掘り方は小型方形で、白色砂質土によって埋められる。試掘確認調査時に3Tで同様のピットを1基検出した。方位はN-84°-W、柱間寸法は東から1.51m、1.68mである。

#### 土坑

**SK04** (第7図、写真図版2) 直径0.8~0.9m、深さ0.8mの底面が平坦な土坑である。直径0.4m、深さ0.4mで、P33より古い。中層より下はしまりのない黒色土で埋まる。底面から6cm浮いた位置に、一端を斜めに切った板状の木製品が出上した。他に須恵器、土師器が出土した。素掘り井戸と考えられる。

**SK05** (第6図、写真図版2) 調査区中央西壁面で東半のみを確認した。直径約0.7m、深さ約0.6mの土坑で覆土は暗黒褐色から黒色を呈する。柱穴の可能性がある。遺物は上部から内面黒色土器が1点のみ出土した。

#### (5)下層遺構

土坑1基と若干のピット状の遺構を検出した。遺物が出土した遺構はない。下層包含層から縄文土器、弥生時代終末期の土器、奈良時代土師器、須恵器が出土した。

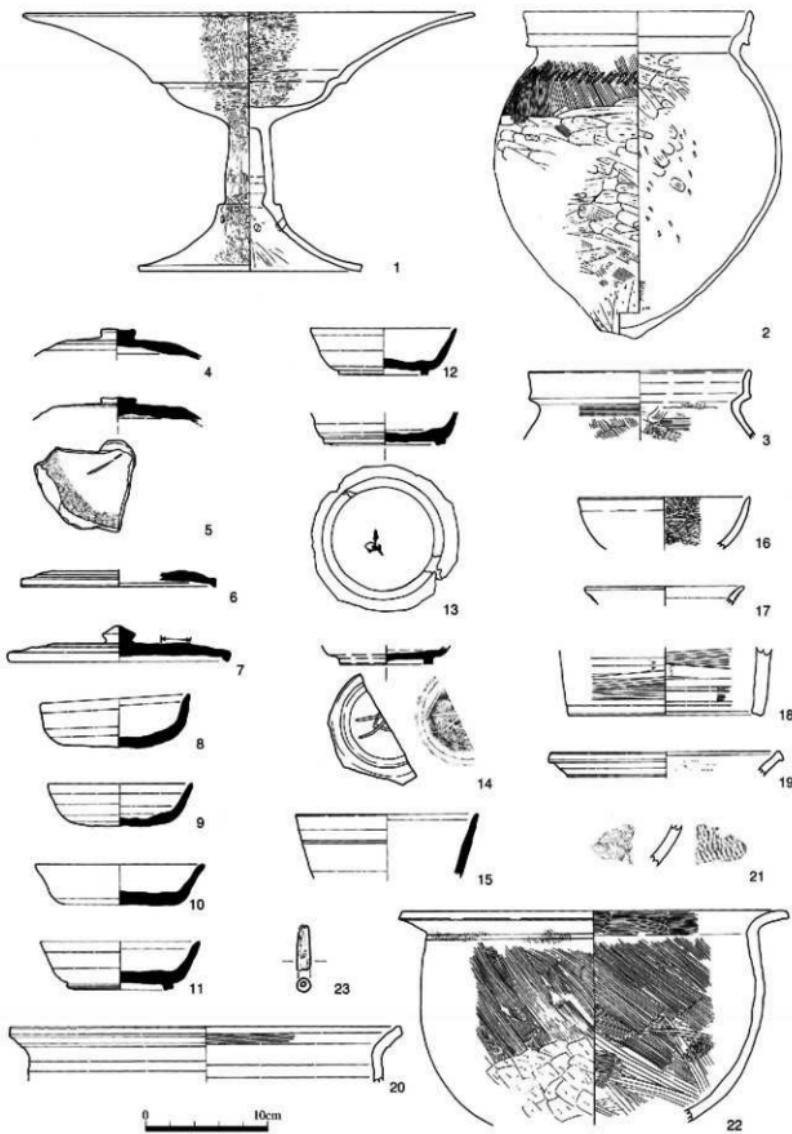
#### (6)遺物

##### 下層遺物包含層 (第14図、写真図版3)

1は、弥生時代終末期の高環である。脚部内面にハケメを施す以外は丁寧なヘラミガキを施す。脚部にわずかに赤色塗料の痕跡が残る。坏部は大きく斜め上に伸びる。脚部の穴は8個と推定される。2は弥生時代の壺である。胸部下半中程と上半の一部に煤が付着する。3は同じく弥生時代の壺である。

##### 上層遺構 (第14・15図、写真図版3・4)

**SD01** 4~15は須恵器である。4~7は蓋である。4、5は扁平なつまみを有する。4は外間に自然釉が掛かる。5の内面には、中央付近にヘラ記号を有し、縁辺部付近には黒褐色を呈する煤状の物質が付着する。熱を受けたためか内面縁辺部は剥離している。7はSD01上面出土の破片と上層包含層出土の破片が接合した。宝珠状つまみを有し、口径18.0cmを測る大型の蓋である。8~10は無台の坏である。8は厚手で端部は外傾し、やや尖る。9は、内面中央付近に不定方向なでを施す。10は生焼けで白褐色を呈する。底部外面は滑らかに磨耗し、底部内面は若干磨耗する。11~15は有高台の坏である。12は小型の有高台



第14図 遺物実測図(1/4)

坏で、内面に自然釉が掛かる。13は外面に墨痕がある(写真図版5)。14は底部外面に「女」の文字が刻まれている。15は体部に一条の沈線を施すタイプの大型の有高台坏である。口径は15.0cmを測る。16~22は土師器である。16は内面黒色処理を施した椀である。内面はヘラミガキが施される。17は小型の甕で内外面とも器壁が剥離している。19、20、21は甕である。21は外面に平行タタキ、内面は部分的にハケメを施す。22は鍋である。底部を欠くがほぼ完形である。外面は上半ハケメ、下半ヘラケズリ、内面は上半ハケメ、下半粗めのハケメを施す。18は円筒型土製品である。内外面ともロクロナデ・カキメを施す。器厚は約1.2cmと厚く、胎土は堅緻であり、他の土師器の胎土とは異質である。23は細身の土鍤である。残存長3.65cm、最大径1.1cm、孔径0.35cm、4.05gを測る。

**SD03** 24は須恵器の無台坏である。内面は底部中央までロクロナデを施し、部分的に不定方向ナデを施す。底部内外面、特に内面が磨耗する。底部内面に墨痕様の薄いしみがある。SB01 (P07) 出土・破片と接合した。35は須恵器大甕の口縁部である。外面に櫛描波状文を二段施す。27は土師器の壺口縁部である。35、27はSD03最上部から出土した。

**SD04** 25は須恵器の蓋である。器盤は厚く胎土は黒灰色を呈し堅緻である。26、29は須恵器の有高台坏である。26は底部外面は丁寧なロクロヘラケズリ、内面はロクロナデの上から不定方向ナデを施す。内面は滑らかに磨耗している。高台は高く外側にふんばる。7世紀末から8世紀初頭の所産と考えられる。肉眼では判別しにくいが、赤外線写真には墨痕様の黒い部分が写る(写真図版5)。29は底部外面に「生」と思われる墨書がある。28は土師器甕の口縁部である。いずれもSD04最上部から出土した。

**SD09** 32は須恵器蓋で、内面縁辺部付近に墨書があるが、判読できない。

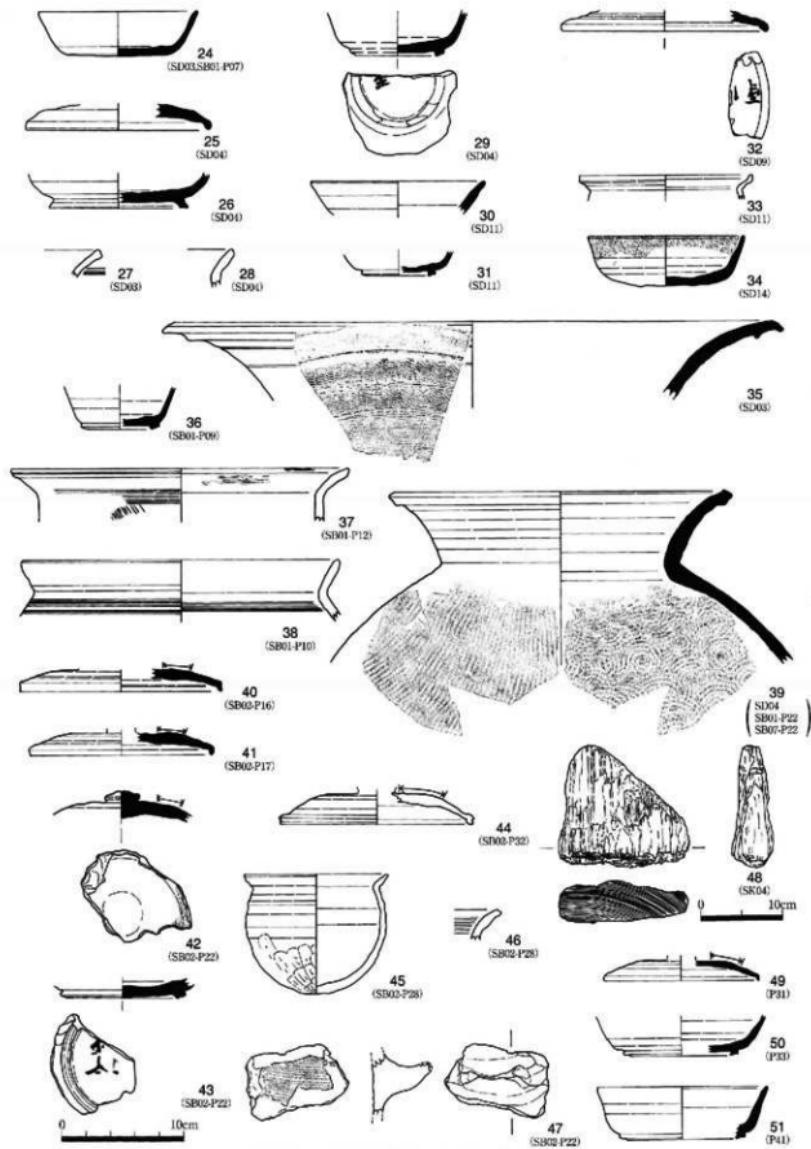
**SD11** 30は須恵器壺口縁部、31は須恵器の小型有高台坏である。33は土師器中型甕の口縁部である。

**SD14** 34は須恵器の無台坏で、生焼けの白褐色を呈し、口縁部内外面に煤が付着する。

**SB01** 36は須恵器の小型有高台坏である。体部立ち上がり部に接近して扁平な高台がつく。37、38は土師器甕口縁部である。37は端部外面に沈継状のへこみがあり、内外面ハケメを施す。体部外面には煤が付着する。38は内外面カキメを施す。39は須恵器の甕である。体部外面は平行タタキの上から軽くカキメを施す。SB01、SB02、SD04最上部、上層包含層出土の破片が接合した。他にも同一個体と思われる破片がSD01、SD03から出土した。

**SB02** 40~43は須恵器である。40~42は壺蓋である。すべて頂部から縁辺部への中程にロクロケズリ痕を残す。42はその上から軽くロクロナデを施す。内面端部付近には煤が付着する。43は有高台の坏である。器皿は使用により全体に磨耗しているが、底部内面が特に著しい。底部外面に墨書があるように見えるが、赤外線写真では異なる部分が黒く写る。堅いもので摺ったように筋状に光沢のある部分が黒く写っていることから、文字のように見える部分も転用鏡として使用された際につけた墨跡と考えられる。44~47は土師器である。44は須恵器を模した土師器の蓋である。口縁端部外面は凹線状にへこむ。頂部はロクロケズリを施す。外面の一部には赤彩の痕跡が残る。45は小型の甕である。口縁部から体部上半まではロクロナデ、下半はヘラケズリを施す。丸底である。46は壺の口縁部である。47は把手である。内面は粗い横位のハケメを施し、胎土に砂粒を多く含む。甕、あるいは鉢の把手と考えられる。

**SK04** 48は上端を斜めに切った板状の木製品である。下端付近には工具によって切断し



第15図 遺物実測図(48は1/6、他は1/4)

た痕跡が残る。

P31 49は須恵器坏蓋である。中心から端部にかけての中程にロクロケズリを施す。

P33 50は須恵器有高台坏である。

P41 51は須恵器有高台坏である。口縁部内外面が使用により磨耗する。

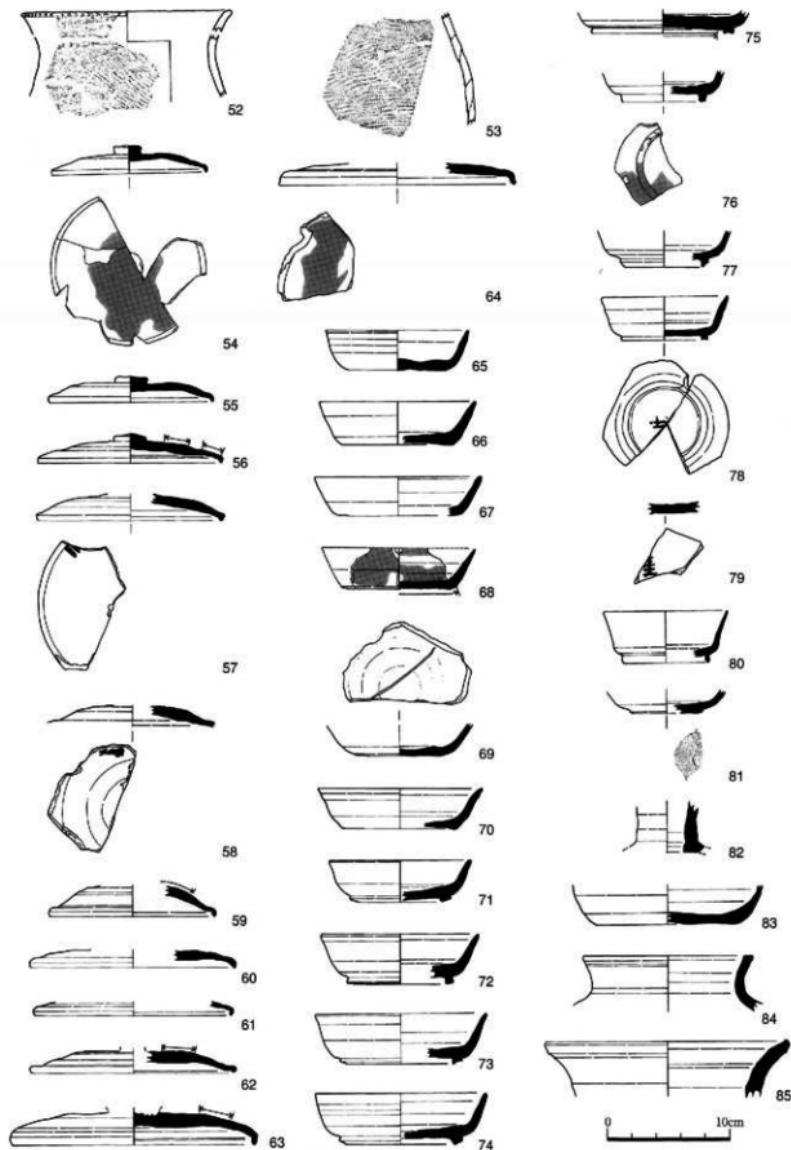
#### 上層遺物包含層（第16図、写真図版4）

52、53は弥生時代中期の所産と考えられる、52はLRの原体を縱方向に、53はLR原体を斜めに転がす。天王山系と考えられる。

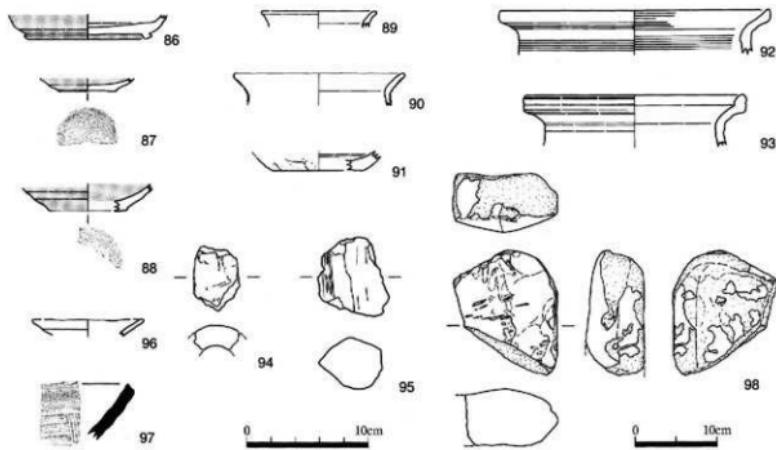
54～85は須恵器である。54～64は坏蓋である。54は外面は自然釉に覆われている。内面はロクロナデを施し、中央部付近は不定方向ナデを施す。内面中央部を中心に磨耗し墨痕が残る。転用便と考えられる。55はボタン状のつまみを有し、頂部はロクロケズリ、端部は小さく折り返す。56は扁平なつまみがつき、外面はつまみの周辺とへこんだ部分を除き、全体にロクロケズリを施す。内面は端部付近を除き不定方向ナデを施す。端部内面に明瞭な稜はない。57は内面に墨書と思われる墨痕がある。58は頂部ヘラ切り後ロクロナデを施す。内面に光沢のある黒色物質が付着する。59は頂部にロクロケズリを施し、内面には褐色の漆膜が付着する。60は端部内面に稜を持たない。頂部はロクロケズリの後ロクロナデを施す。62は頂部をロクロケズリした後、つまみに近い部分に上からロクロナデを施す。端部は丸く巻き込む。63は口径約20cmの大型品で、つまみの痕跡がある。64は生焼けで淡橙色を呈するが、胎土は比較的堅緻である。内面に墨痕がある。65～70・81は無台坏である。68は体部内外面に墨痕がある。底部外面はロクロケズリを施す。69は底部内面に「/」のヘラ記号がある。81は底部回転糸切りである。71～78・80は有高台坏である。72は底部内面と口縁端部内面が磨耗する。75は底部外面にロクロケズリを施す。底部内面はロクロナデの上から不定方向ナデを施し、滑らかに磨耗している。76は外面に墨痕がある。78は矮小化した高台がつき、底部外面に「土」のような墨書がみえるが、赤外線写真によると墨痕はさらに広がっている（写真図版5参照）。

79は坏底部破片で外面に「生」の墨書がある。82は長頸壺である。外面に暗緑色の自然釉が掛かる。83は壺の底部と思われる。底部外面はヘラケズリを施し、使用により磨耗している。84、85は壺口縁部である。

86～93は土師器である。86は須恵器模倣の有高台坏である。外にふんばる低い高台がつく。外面に赤彩が見られる。内面は器面がかなり摩滅しているために赤彩痕が残っていないと考えられる。87、88は底部回転糸切りの碗である。内外面とも赤彩される。89、90は小型から中型の壺口縁部である。91は小型壺の底部である。体部外面は手持ちヘラケズリ、底部外面は摩滅のためはっきりしない。92は口縁端部を上方へつまみ出し、内外面に粗いカキメを施す。93は端部を内側に屈曲させる。94はふいご羽口である。表面に鉄滓の付着はない。95は用途不明の上製品で表面にハケメ状の調整痕がある。直角よりやや広い稜を持つ。比重が軽い。96は中世土師器の小皿である。97は珠洲焼の片口鉢である。98は砂岩の砾石である。下部と側面の1つが欠損している。遺存している面はいずれも使用していると思われるが、剥離が激しい。幅2～3mm、深さ1～2mmと深い条痕と幅1mm以下の浅い条痕が残る。



第16図 遺物実測図(1/4)



第17図 遺物実測図 (98は1/6、他は1/4)

#### 4 小結

今回調査では上・下層の2層の文化層を確認した。

下層遺構は時期を特定する遺物の出土がなかったが、遺物包含層から弥生時代終末期の土器がまとめて出土していることからそれ以前の時期に属すると考えたい。しかし小規模なピットなどを検出したのみで、弥生土器の出土も多くないことから、集落の中心ではなかったようである。平成8年度調査区では弥生時代後期から終末期にかけての溝1条と一定量の土器の出土があったことから、集落の中心は8年度調査区の南方にあると推定される。

上層遺構は2つの小期に分けられる。古い第1小期に属するのは、SD16、SD03、SD04、SD13である。第2小期になってSD01、SD02、SB01、SB02、SK04、SK05などが造られる。第1小期に属するSD03の下層からは遺物の出土がほとんどなく掘られた時期は特定できないが、埋まった時期は第2小期の遺構が営まれる直前だったことが上部出土の遺物からいえる。

第2小期の遺構はSD01、SD02とSB01、SB02が方向を揃えていると考えられる。SB01とSB02は出土遺物から8世紀前半から半ば頃に属するとみられ、SB01が若干古い可能性があるがそれほど時期差はないと考えられる。SD01もほぼ同時期で8世紀終わり頃まで残ると考えられる。

試掘確認調査によるとSD01は調査区の南側に伸びており、平成8年度調査区A区のいずれかの溝につながる可能性がある。8年度調査区でも掘立柱建物とされる柱穴が見つかっており、今年度調査区との間に掘立柱建物が存在するとみられる(第18図)。一帯は、区画溝によって区切られた中に掘立柱建物が配されていたことが想定される。上層遺物包含層出土の遺物からみて、遺跡は9世紀中頃まで存続していたと考えられる。

遺物では、墨書き土器と断定できるものが過去の調査を合わせ7点、墨痕が認められる土器が8点出土しており、墨痕の認められるものの中には転用硯が含まれることなどが注目される。また、墨痕は認められないものの、磨耗している部位から転用硯と考えられる土器も存在する（第19図）。

また、墨書き土器の内、則天文字である「生」が出土したことは特筆に値する。則天文字は中国唐代の則天武后が考案した17文字で、中国では則天武后没後、使用が禁じられたが、日本では呪術的な力を持つ文字として残ったとされている。則天文字が地方に普及したルートとして平川南氏は基本法典の「律」を通しての地方行政のルートと、仏典を通じて僧侶が会得するルートの2つを挙げている（平川2000）。富山県内で則天文字が出土した遺跡は大島町北高木遺跡と富山市米田大覚遺跡の二ヶ所だけである。両遺跡とも公的機関と考えられている。本遺跡で出土した「生」の則天文字が出土している石川県金沢市三小牛ハバ遺跡（金沢市教委1994）は寺院跡である。則天文字は地方にまで広がっていたと言え、出土する遺跡の性格は限られているといえる。その意味で本遺跡で則天文字が出土したこととは、一般集落とは異なる官衙的な性格を持っていたことの有力な裏付けとなろう。

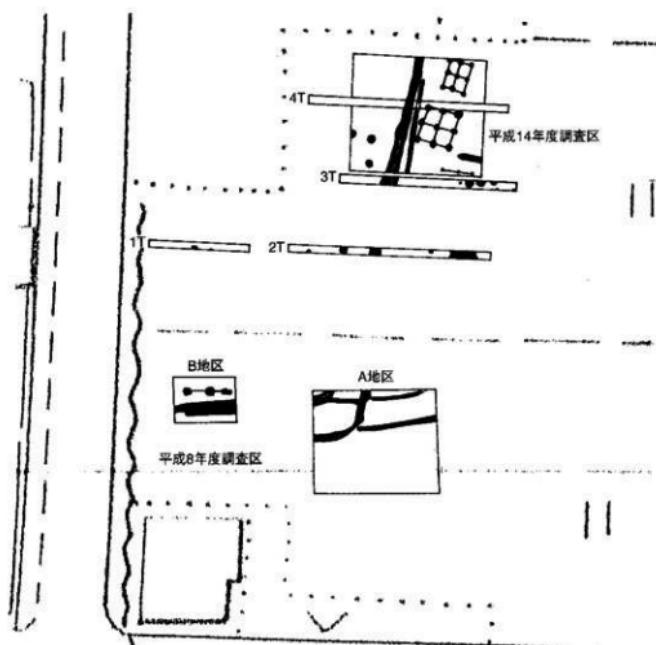
また、もう一点注目されるのは、本遺跡が奈良時代より前からそのような官衙的性格を持つ遺跡として存在していたらしいことである。第15図26は8世紀初頭にさかのぼる遺物と考えられるが、これが墨痕の付着した転用硯であることから律令制の初期にすでに識字層が本遺跡にかかわっていたといえる（本遺跡出土の墨書き土器はおそらく8世紀後半から9世紀前半に属すると思われる）。

8世紀前半以前の墨書き土器の出土数を見ると、富山県内で該期に属する墨書き土器を出土した遺跡は小杉流通団地遺跡群など4遺跡で墨書き土器を出土した全遺跡数の10%に満たない。石川県の墨書き土器の研究によると8世紀前半以前の墨書き土器点数は総点数の2.8%に過ぎない（社石川県埋蔵文化財保存協会1998）。池野正男氏によると、富山県内で一般集落に墨書き土器が多くなるのは9世紀後半からである（池野1997）。それより前の段階に転用硯、墨書き土器を出土する本遺跡は、常願寺川・白岩川扇状地一帯の租税の集積の場として機能していたと考えられる。

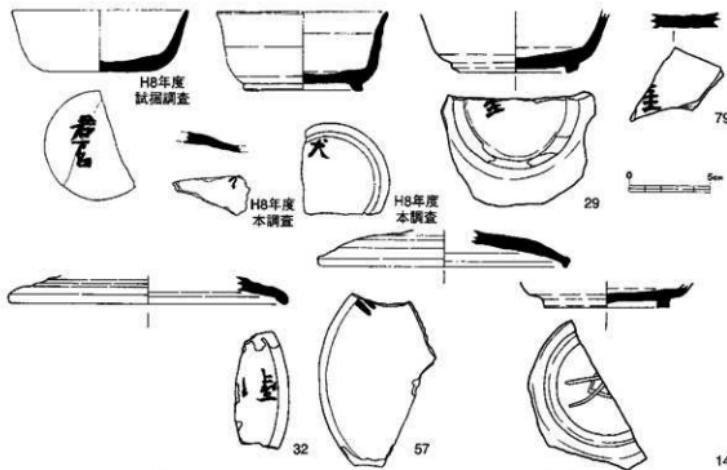
（安達志津）

## 参考文献

- 池野正男 1997 「越中における9世紀代の土器様式」『北陸古代土器研究』第6号  
金沢市教育委員会 1994 『三小牛ハバ遺跡』  
社石川県埋蔵文化財保存協会 1997 『石川県出土文字資料集成』  
社石川県埋蔵文化財保存協会 1998 『古代北陸と出土文字資料』  
富山市教育委員会 1997 3.水橋二杉遺跡『富山市内遺跡発掘調査概要I』  
平川 南 2000 『墨書き土器の研究』吉川弘文館



第18図 水橋二杉遺跡、奈良・平安時代主要遺構(1:500 上が北)



第19図 水橋二杉遺跡出土・墨書き土器・刻書き土器(1/3)

## II 願海寺城跡

### 1 遺跡の位置と環境

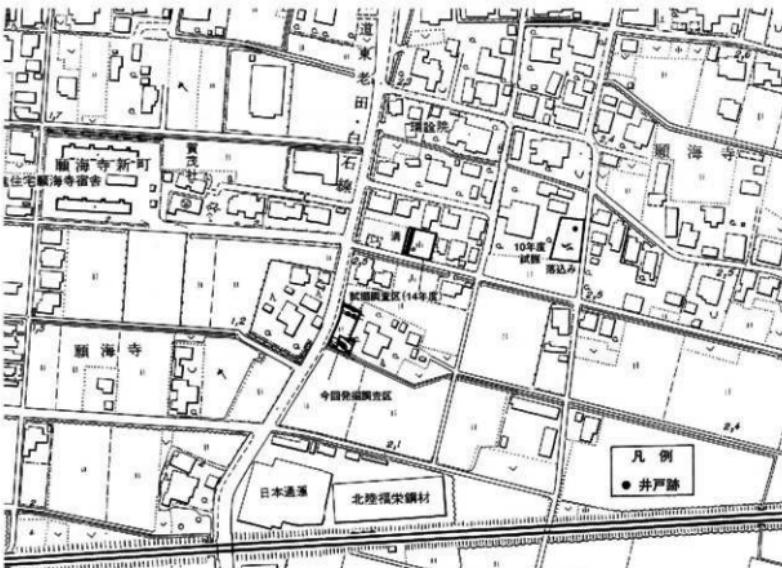
願海寺城跡は、富山市街地の西南西へ約8kmの富山市願海寺地内に所在する。遺跡は射水丘陵の北側に広がる射水平野の南東部に所在し、ここを北流する鍛冶川（現新堀川）の右岸に立地しており、標高は2mを測る。明治43年測量の迅速図によれば、願海寺集落のすぐ西側を鍛冶川の大きな支流が流れしており、願海寺城はこれに面した微高地上に占地していたと推定される。

周辺は沖積低地で、縄文時代から中世の遺跡が点在する。特に弥生時代に遺跡が増加し、東老田Ⅱ遺跡（富山市教委2000）、小杉町針原東遺跡（小杉町教委1994）では溝など水田と関わると考えられる遺構が検出されている。平安時代には東老田Ⅰ遺跡で大規模な粘土採掘坑群や井戸、室町時代には針原東遺跡で在地領主の居館跡が検出されている。

### 2 調査の経過

#### (1)既往の調査研究

願海寺城は、上杉謙信方の武将寺崎民部左衛門が擁った城として、「上杉家文書」「信長公記」「越登賀三州志」故墟考「加越能三州地理志稿」「越中志徵」などに城の名前が見える。寺崎氏については「越中志徵」などにも多く語られている。寺崎氏の動静や城の歴史についての検証は、1975年から1976年に『富山史壇』に相次いで発表された石川旭丸・高岡徹両氏の論考（石川1975、1976、高岡1975、1976）を端緒とし、その後高岡氏により城の詳細な分析が続けられている（高岡1980、1991、1997、2000）。



第20図 発掘調査区と周辺の調査状況(1:3,000)

城の位置については、前述の文書のいずれにおいても明言していない。これは江戸時代中期頃にはすでに塹などが埋没し痕跡が判然としなくなっていたためであろう。塙照夫氏は願海寺字館本地内の加茂社周辺と推定した（塙1972）ほか、高岡氏も願海寺周辺の小字名や「願海寺の七曲り」と呼ばれる古道の存在に着目して城下の範囲を推定し、城の中心は塙氏と同じ字館本地内とみられている（高岡前掲）。

## (2) 調査に至るまで

願海寺城跡は前述のように古くから知られていたが、埋蔵文化財として富山市遺跡地図に登載されたのは平成5年の改定版が最初である。遺跡範囲認定にあたっては、昭和63年から平成3年に実施した市内遺跡分布調査の結果を踏まえ、高岡徹氏が調査した字・通称の範囲を願海寺城及び城下の範囲と推定して決定したものである。

遺跡範囲内における試掘確認調査はこれまで4件が行われた。遺跡の北部や東部ではこれまで遺構は確認されず、字館本地内において中世～近世の溝・土坑等が検出されている。

## (3) 調査の経過

平成14年5月30日、願海寺字館本735番1における個人住宅建築について下村茂・下村明子氏から埋蔵文化財所在確認依頼書が提出された。これを受けて埋蔵文化財センターでは6月7日に試掘確認調査を行い、予定地341.28m<sup>2</sup>全域に遺構の広がりを確認した。依頼者との協議の結果、敷地は盛土を行うが、軟弱地盤のため建物基礎は地下8mまで地盤改良を行う必要が示された。このため、建物部分・浄化槽部分・擁壁部分計90m<sup>2</sup>について発掘調査を行うこととした。この調査に先立ち、調査区北側進入私道部分において排水管設に伴う工事立会を行ったところ、戦国時代の素掘井戸2基を確認した。

調査は平成14年8月8日から9月2日まで12時間を行った。バックホウにより表土を除去し、それより下は人力で掘削した。測量は測量機器（トータルステーション）を使用し、任意の局地座標を設定した。調査完了後は埋め戻しを行った。

なおこの後調査区北側の進入私道改良工事立会で、溝3条、素掘井戸1基、土坑1基を検出した。土坑底面には厚さ5cmの植物層が堆積していた。いずれも戦国時代に属する。

## 3 遺構と遺物

### (1) 地形・層序

遺跡周辺は戦後の圃場整備で変更を受けている。旧地形を残す明治43年測量迅速図を見ると、標高2.5mの等高線が最も丘陵側に入り込んだ奥津城に願海寺集落が所在する。このことはその周囲が最も低地化しており、水利が集まりやすい環境にあったといえる。昭和21年米軍撮影空中写真を見ると、館本周辺は陸化し、集落の東側や加茂社の西側は低湿化していることが読み取れ、館本は微高地に立地していたことがわかる。調査地における住宅用地盤調査によれば、地下8mまでシルト・粘土層が続き、基盤層が疊となる。

調査区における層位は、第Ⅰ層水田耕土・耕盤土、第Ⅱ層褐色土で、第Ⅲ層の形成は江戸時代以降である。第Ⅲ層黄色シルト土が地山である。戦国時代から江戸時代初期の遺構は第Ⅱ層と第Ⅲ層の間に形成されている。第Ⅳ層灰オリーブ色粘質土、第Ⅴ層青灰色砂質土で、第Ⅵ層が湧水層である。堀は第Ⅴ層上面まで、井戸は第Ⅴ層中程まで掘られる。

### (2) 遺構

①概要 調査では、城館とみられる郭の南端部分とその外側（南側）に設けられた二重の堀（濠）を検出した。内側の堀には細い土橋が伴い、郭側の浅い部分には遺物の一括廃棄が認められた。遺物には土師器、瀬戸美濃茶入、壺、木簡、将棋駒、漆器、各種木製品、砥石、石臼、炭化米、種実（モモ・ブドウ属・ウリ科等）がある。郭部分からは素掘井戸

を検出した。郭・堀はその後埋立・整地され、江戸時代前期に至って浅い溝が掘られる。

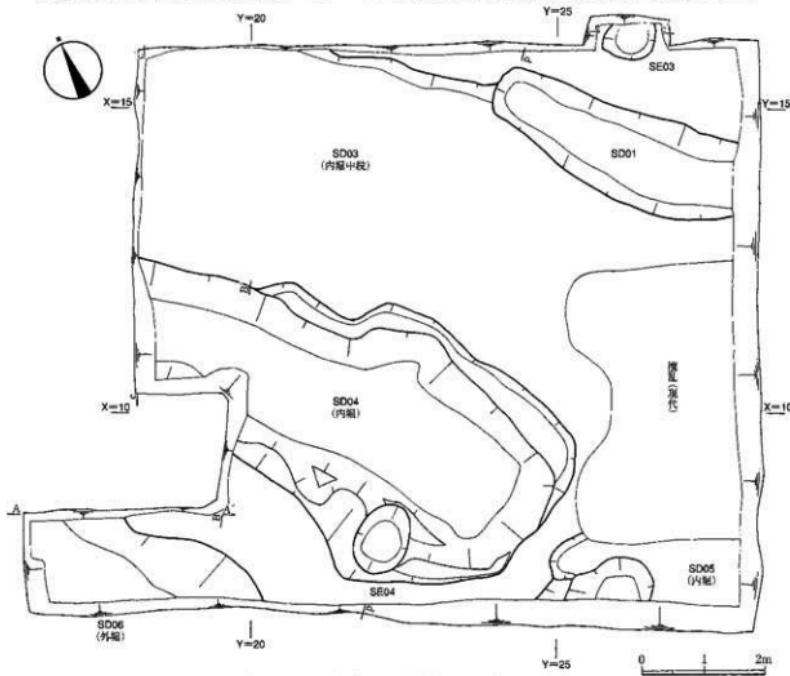
## ②戦国期の遺構（第21～23図）

**堀** 郭を廻る堀は二重になっており、北側の堀SD03・04・05が内堀、SD06が外堀である。内堀は郭側の深い堀SD03と外側の深い堀SD04・05からなり、SD04とSD05の間には幅0.5mの土橋が存在する。

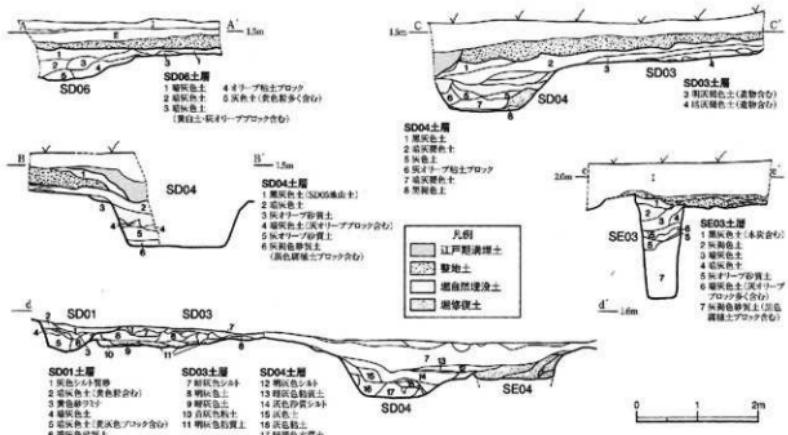
**SD03** 幅4.0m、延長10.0mを検出した。北側掘込みラインを基準にした方向は、N-40°-Wである。深さは15～20cmを測る。底面はいったん深く掘られ、小凹凸を形成するが青灰色粘土により10cmほど埋戻して平坦面を造っている。この面から少し浮いた状態で北側掘込み部に寄って①で述べたような多くの遺物が出土した（第23図）。これらは北側の郭方向より投棄されたものとみられる。

遺物の出土状況をみると、掘込み部側が密度が高く南側はまばらとなる。土師器・？・種実（特にモモが多い）は西部に多く集中する傾向にあり、その内から将棋駒1点が出土した。土師器破片の接合関係は、SD03内で最大2.5m離れたものが接合した。SD03を超えた接合関係は認められなかった。木筒はSD03中央から自然木・木製品・木柄などと共に出土した。これらは短期間に一括して廃棄されたものと考えられる。

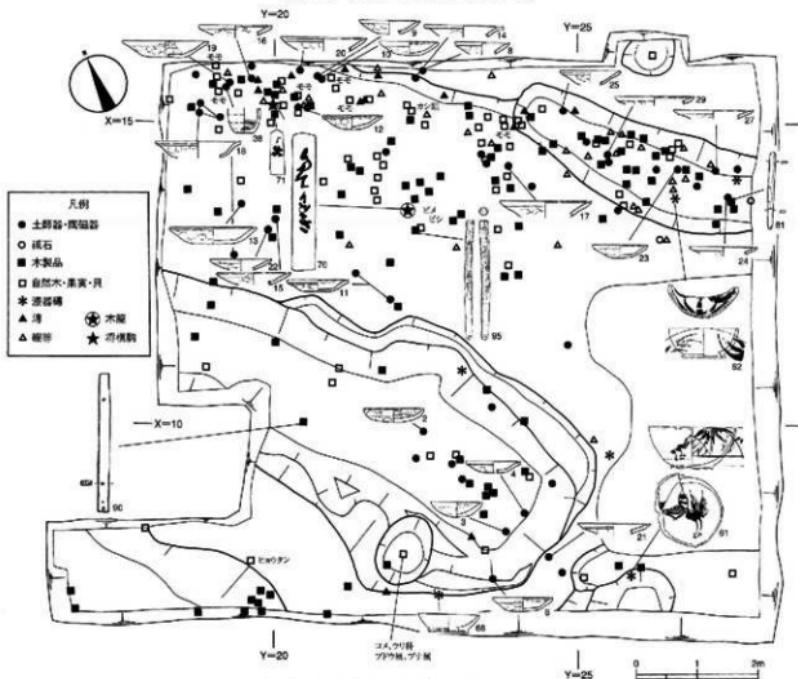
**SD04** 長さ8mを確認した。幅3.0～4.0m、掘込み面（SD03底面）からの深さ70～80cmを測る。西北半の主軸方向はN-42°-WでSD03とほぼ同方向であるが、南東端でやや



第21図 須海寺城跡遺構平面図(1:80)



第22図 遺構土層断面図(1:40)



第23図 願海寺城跡遺物分布図(1:80)

南へ向きを変え、N-30°-W方向をとる。遺物は壠東端部に多く、土師器・木製品・漆器がある。壠底近くから出土した土師器はA種でありこれが最も古い形態とみられる。壠は暫くして北東壁側の底面近くにおいて粘土による段築（修復）を加えている。またこの壠と重複する井戸SE04を同質粘土を使って埋めて整形を行う。壠は自然埋没してほぼ平坦化した後、厚さ約20cmの盛土整地が行われている。

**SD05** 土橋をはさんでSD04の南東側に所在する。延長3.2mを検出した。北側は攪乱を受け規模は不明である。掘込みは緩やかである。壠肩部から漆椀（61）が出土した。

**SD06** SD04の南西1.5mに所在し、延長2.5mを検出した。幅は2.0m以上で主軸はN-30°-Wをとり、SD04と平行する。壠肩部からヒヨウタン片が出土した。壠内からは木製品が出土した。陶器類はなく他の遺構との時期比較は困難である。壠が完全に埋没した後、厚さ約20cmの盛土整地が行われていた。

**溝 SD01** SD03の南東側掘込みと重複し、SD03より新しい構築である（第22図d）。上部の遺物はSD03で認められた一連の遺物廃棄状態であることから、SD03の築造→SD01→遺物廃棄という経過をたどると考えられる。SD01下部からは、土師器片数点と自然木が多く出土した。自然木には一部焼け焦げたものもある。

**井戸 素掘井戸 2基**がある。

**SE03** 調査区北東部で確認した。平面形は円形で、径0.7m深さ1.7mを測る（第22図e）。井戸から東側では厚さ20cmの黄色土による盛土整地が行われ、井戸上面では井戸を覆うように厚さ10cmほどの盛土がなされる。井戸の西側での観察から郭構築の際にかなり地山面を削平している。

**SE04** 調査区南西部で確認した素掘井戸で、SD04と重複しこれより古い構築である。平面形は円形で、径0.9~1.2m深さ1.7mを測る。井戸内から木製品、イネ属・ウリ科・ブドウ属・ブナ属の種実が出土した。

**整地跡** 郭部分における整地跡層は、前述のとおり井戸SE03直上部、壠SD03・04・06上部において整地層を検出した。整地層は調査区のはば全面に広がる。整地土は地山の小ブロック（径5~30mm）を多く含む暗褐色土である。整地層内からの遺物出土はなかった。

③江戸期の遺構 溝1条がある。

**SD02** SD04・SD05上部の整地層上面から切り込まれた溝で、調査区西端で確認した規模は幅1.8m深さ0.5mを測る。溝内から越中瀬戸・唐津が出土した。

### (3) 遺物

弥生末～古墳時代前期の土器、古代の須恵器、戦国時代の土師器・珠洲焼・八尾焼・美濃瀬戸・青磁・砥石・石臼・埴・木製品・自然木、江戸時代の越中瀬戸・唐津・伊万里がある。文字資料として木簡・将棋駒が各1点ずつ出土した。

弥生時代末～古墳時代前期の土器（1） 高杯口縁端部である。混入品とみられる。

土師器（2~30） すべて非クロロ成形の皿で、計測可能なものの28点のうち灯明皿に転用されたものが10点（36%）あり、2点に熱破碎が見られる。口縁部形態により以下に区分した。

A種：口縁端部が丸いもの B-1種：口縁端部を上につまみ上げるもの

B-2種：口縁端部内面が浅く凹むもの C種：口縁端部が薄く尖るもの

A種はSD04にのみ認められた。B種はSD03廃棄遺物の主体をなす。C種はごく少ない。

法量から口径8~10cmの小形品、11~13cmの中形品、14~16cmの大型品に区分される。全体として小形品の割合が高い（50%）。25の胎土には金雲母を含む。

珠洲（31~33） 31の大甕は胎土に海綿骨針を多く含む。32の内面は剥落している。33の摺

鉢は間隔が密な7本単位の卸目を施す。胎土上に海綿骨針と黒色ガラス質粒を含む。吉岡編年(吉岡1994)によるIV-V期の製品である。

**青磁(35)** 龍泉窯系蓮弁文碗の体部片。

**瀬戸美濃(36~38)** 36は天目で口縁端部が短く外反する。大窯II-I期。37は天目の削出高台。38は

褐鉄釉茶入で、破断面や内外面に油煙が付着し、破損後灯明用に転用された。

**八尾(図版11右上)** 壺の体部片2点がある。

**越中瀬戸(34、39~43)** 34、42は摺鉢。39は回転糸切底の小皿。40、41は灰釉の丸皿で、40は内面に釉止の段をもちやや内消する。宮田編年(宮田1997)によるI-II期(16C末~17C前半)の製品である。41は口縁に油煙痕が残り灯明皿に転用している。43は鉄釉の壺か。肥前(44~46) 44は灰釉碗で二次被熱を受けている。45は蓮瓣とみられる植物文鉄絵灰釉碗。46は灰釉のひだ鉢か。

**伊万里(47~48)** 47は全釉の草花文陶胎染付碗で18世紀前半。48は草花文染付碗である。

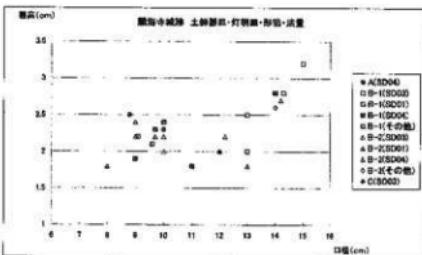
**砥石(49~52)** 49~51は凝灰岩製仕上砥、52は砂岩質で被熱を受ける。すべてSD03出土。

**石臼(53)** 安山岩製の上臼で、摺面はやや凹面をなし、よく使い込まれている。摺面の副溝は4本が確認でき間隔は不揃いである。四角形の挽手穴は近接して2つがあり彫直しか。上面・摺面・挽手穴1つの内部が被熱により黒化している。試掘時郭内土坑SK01出土。

**塚(54~59)** 長方体に整形された焼成粘土塊で、低温度焼成のため、表面は白化、内部は黒化し脆弱である。各面の調整はハケ状工具により粗く行われる。胎土中には長い植物質纖維痕を残す。54の表面には指紋の焼け焦げが1ヶ所認められた(図版11下)。

**漆器(60~69)** 蓋(60)・椀(61~68)・部品(69)がある。60は小出城跡出土の蓋と同様の形になると推測される。総黒色。61は椀身部は下方でやや丸みをもち、口縁部は直立に立ち上がり器壁は薄い。高台は低くロクロ挽きの跡が残る。総黒色で内外面に漆絵が描かれ、内面に赤色で鶴と扇(?)、外面に赤色で鶴と笛・植物文を描く。内面文様構成は扇を中心配し2羽の鶴が対に描かれる可能性がある。樹種はブナ。62は全体的に小さく、身部上方はほぼ直立し下方では丸みが強くなる。高台は低い。総黒色で内外面に漆絵が描かれ、内外面共に赤色で五枚符と植物文を描く。樹種はブナ。63は高台が高く、器壁は厚い。総黒色で外面に赤色で丸とその丸の中に「五(?)」が描かれる。また高台内には記号「一(?)」が線刻される。64の樹種はスギ。65は総黒色で外面に赤色で丸が描かれる。66は全体的に小さく口縁部は外に開く。高台は低い。総黒色で内面(見込み部分)に赤色が残る。樹種はブナ。68は高台のみ残存する。総黒色で外面はロクロ挽きの跡が残り、高台内より鋭利な工具で穿孔を施し、その周辺には穿孔の際の傷跡が残る。椀身部と高台部を切り取った後、カンナ状工具で切り取った部分を綺麗に整えている。漏斗に転用して使用したものか。樹種はブナ。69は部品の一部である。内側に湾曲し側面は面取りされている。両面に黒色漆を塗った後に本体に貼り付けられていたと推測される。総黒色。樹種はコナラ。

**木簡(70)** 頭部を鈍角に尖らせた木札の両面に墨書きがある。下端部は長軸に直角に刃物で切断・折り取ったとみられる。この行為が行われたのは墨書き以前か以後かは不明である。



墨書は、表面が「多く王き」、裏面が「暫?王り多く已」とみられる。墨書の内容については後述する。表面は大きく削ぎ取り、裏面は細かく削ぎ取っている。表面の「王」と「き」の間の字上に円形の焼け焦げ痕が1ヶ所認められる。長11.3cm、幅1.95cm、最大厚0.5cmを測る。材質はアスナロで、SD03-括廃棄遺物群内出土。

**将棋駒(71)** 五角形で長さに比して幅の短い細身の駒である。表面上部に小さく「与」、中央に「歩」と墨書がある。「歩」は「兵」に字画が似るが、筆の流れから「歩」と判断した。裏面は「と」と読めるが増川宏一氏によれば「今」の略字体とされる。また、表面には「大申(?)斗(?)」3字、裏面に「し」1字が線刻されている。「与」以外は墨書後の刻線とみられる。整形は、表面は斜めに細かく削ぎ取りを行い、裏面は平滑である。長3.75cm、最大幅1.2cm、先端厚0.2cm、基部厚0.45cmを測る。材質はアスナロで、SD03-括廃棄遺物群内出土。この将棋駒についての詳細は第6節で増川宏一氏に記述していただいた。

**木製品(72~111)** 72~74は柄杓である。曲物は綴皮痕が残り、74は底板に2ヶ所綴皮留がある。75・88・89は木札状で75は先端を尖らせる。上部に斜めの刃物傷がある。材質はスギ。76・77は桶底板。76は舟板に転用したもので両端に穿孔がある。78の板には小円孔があり樹皮が通されている。指物部材か。79~81は箸。79・80は断面蒲鉾状、81は断面長方形。82は寄木状。両端とも角落しを行う。83・86は台形状で厚みがあり、先端部のみが焦げている。85は長方体。87は半円形で中央に四角の穿孔がある。90は断面長方形で、相対する2孔のほか下端に小さな2孔がある。91は樹皮で、意図的に平たく伸ばされている。上下端とも斜めに削ぎ取り、平行に揃えている。92は先端を尖らせた板。十止め川か。93は短い四角形棒状の一端に横に切込みを入れる。紐掛けをしたものか。94は細枝の先端に切込みを入れる。全体を丁寧に磨く。タモ等の一部か。95は断面円形の棒で、頭部に径7mmの円形貫通孔(紐通か)がある。団下部にも断面四角形の貫通孔があり、角釘抜跡とみられる。枝の節は鋭利な刃物で切り落とし平滑に整形している。中ほどに円形状の凹み痕が3ヶ所あり、1つは主軸に直交、2つは主軸に対し25°の方向である。これらは断面円形の棒がぶつかった痕跡とみられる。材質はクリ。97は表面に刃物の削痕、断跡などの傷がある。98は平たい形状で、両端が平滑で丸く、使用が著しい。100の両端には鋸引痕が残る。101は柱根もしくは太杭で、下半には樹皮を残す。下面是3方向から大きく刃入れがなされ、残った芯部は折り取られている。102・104・106・107・108・109は先端を尖らせて杭状としている。104の先端には主軸(縦)方向の線状痕が認められる。106の先端は摩滅する。材質はハンノキ。107は焦げている。109の頭部は鋸引で切断したもの。103は先端を細く成形した棒で、全体を磨いて平滑にしている。表面には95と同様の円形凹みが1ヶ所あり、いずれも主軸に対し斜めである。また刃物の切入痕が計17ヶ所認められた。主軸に対し斜めのものが多く最大7mm切込まれている。材質はハンノキ。105は両端とも多方向から切込みを入れ芯部で折り取るもの。110は節をきれいに除去し全体を平滑に整え、先端を削って細くした棒。材質はエゴノキ。111は節を取り除いた面のみを平滑にし先端は斜め切りする棒。基部は2方向から切込み、折った後成形を行わない。

#### 4まとめ

##### (1)土器器の年代について

本遺跡から出土した土器器は層位関係からA種からB種へ変化し、B種が主体となる。B-1種とB-2種は技法が共通しており年代的な差異を認ることはできない。C種はB種より後出するとみられる。B種は総じて口縁部が外反して肥厚し、端部をつまみ上げるタイプである。これを主体とする土器群は、上市町弓庄城跡SD1002(上市町教委1985)

の弓庄城第2群土器（宇野1986）があり、16世紀前半から中頃の年代が与えられている（宇野前掲、宮田1997）。願海寺城跡出土の土師器と比較すると、弓庄城のものは径9cm前後の小形品でも平底であるのに対し、願海寺城跡は丸底のものが多く認められる（4、9、10、23、25、28等）。願海寺城跡のA種は個体数が少ないが丸底を主流とし、弓庄城において第2群に先行するとされた第1群の上器群に類似する。このような様相から、願海寺城跡の主流であるB種は小形品においてまだ古い様相を残していると理解でき、弓庄城第2群土器より古い16世紀第2四半期頃に位置付けておきたい。

## （2）木簡の文字について

木簡表面の「多て王き」は「たてわき」である。「き」は1字でなく「可さ」または「可こ」とする読み方も提示された。<sup>11)</sup>「たてわき」は、苗字または古代官職に由来する「帝刀」（=「たちはき」）の文字をあて、木簡の所有者や居館の関係者とみるほか、裏面にもある「多て」＝「たて」を「館」と解釈し、館（郭）の脇など場所を指し示すとも考えることができる。また、「たてわき」には「たちわき」＝「立湧」の意もあり、公家装束の織文に多く用いられた模様<sup>12)</sup>の一種を指し示す意味もある。

裏面は「暫王り多て己」と判読した。「り多て」以外は劣化のため赤外写真でも確認できない。1字目は「御日」の2字ともみられるが、字画や大きさから1字とみられる。日画となる文字として暫・曆があり、右肩が強く屈曲する字として「暫」の可能性が高い。「己」も不確定であるが、以上より、この文は「ざんわりたてこ」もしくは「ざんわりたてき」にならうか。構成は「ざんわり、たてこ（き）」あるいは「ざん、わりたてこ（き）」とみられる。「暫」は短い間、しばらくの間という意味である。暫は『三州志』にみえる「暫」＝濠とも通じるかもしれない。後者の「わりたて」は「削り立つ」に通じるとみられ、削り込んで攻めたてる、突き進んでやっつけるという意味がある。したがって「暫割り立て」は短時間に攻めたてること、あるいは攻撃の命令とみる説、堀側から削り込んで攻め立てると解釈することも可能であろう。堀を「己」は「子」の当て字、あるいは干支の一部であろうか。これら表裏の文字に関連性があるとみた場合、館や堀に関係した戦略的な内容が浮かび上がるのではないだろうか。

## 註

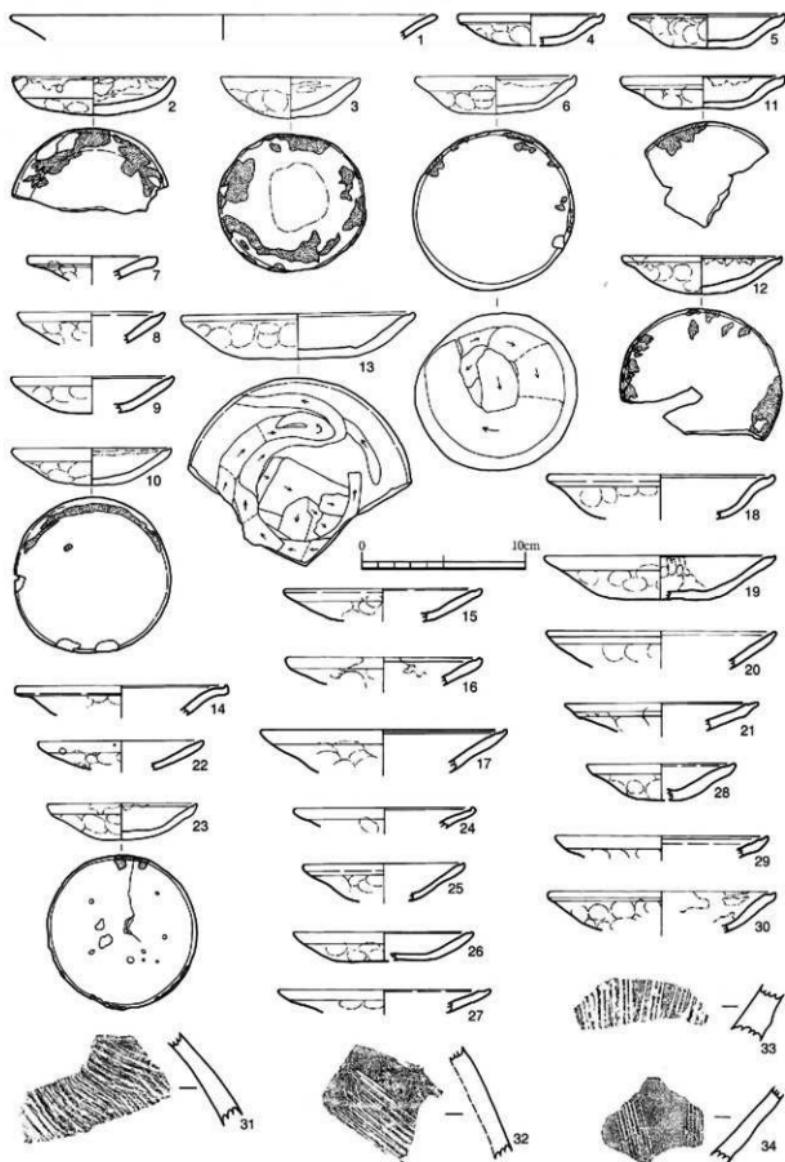
- (1) 木簡の墨書き文字の解説には企龍、宮田、高森、加藤、兼丁各氏の指導を得た。「多て」、「王」の文字以外は各氏の解説はすべて異なっており、今回最終的に提示した文字は、各氏の意見を参考に最終的に古川が判断した内容である。
- (2) 立湧紋は、対角した山形の曲線で向き合った中央はふくれ、両端はすぼまった形を連ねたもの（新村出編1983）。

## （3）遺構の性格・年代について

今回確認した堀を伴う戦国期居館は、郭とそれを取り巻く二重以上の水堀という構造をもつ。土塁の存在は確認できない。これが文献に現われる願海寺城にあたるかどうかの検討を行ってみたい。

江戸後期に著された『越登賀三州志』故墟考には「斎跡多し」とあり、調査で検出した整地によりこの頃は堀の痕跡が判らなくなっていたとみられる。したがって『三州志』のいう「暫跡」は、整地されなかった堀の痕跡が付近に所在していたか、あるいはまったく別地点をさすのかは今のところ判断できない。

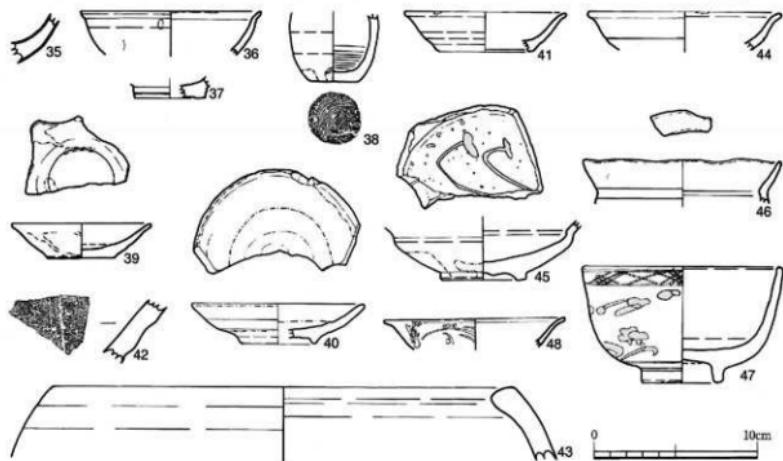
堀の構造をみると、内堀は深浅二段に掘られており、郭側の浅い部分（SD03）は幅4m、深い部分（SD04・05）は幅3～4mである。外堀は内堀の南1.5mに所在する。これ



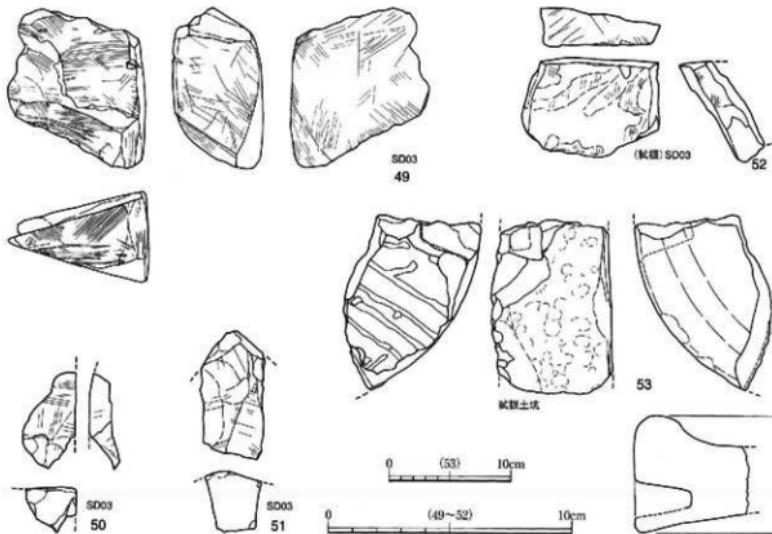
第24図 遺物実測図(1/3) 2~6・31・33:SD04 7~21・32・34:SD03 22~27・29:SD01 28・30:試掘

らの堀に水を湛えると幅10m以上の大規模な水堀が出現し、居館関係者でないと土橋の位置がわからず深堀にはまってしまう。このような構造は防御性を高めたものと理解できる。

堀SD03で検出した一括廃棄遺物の土器師の年代検討から、居館が機能した主な年代は

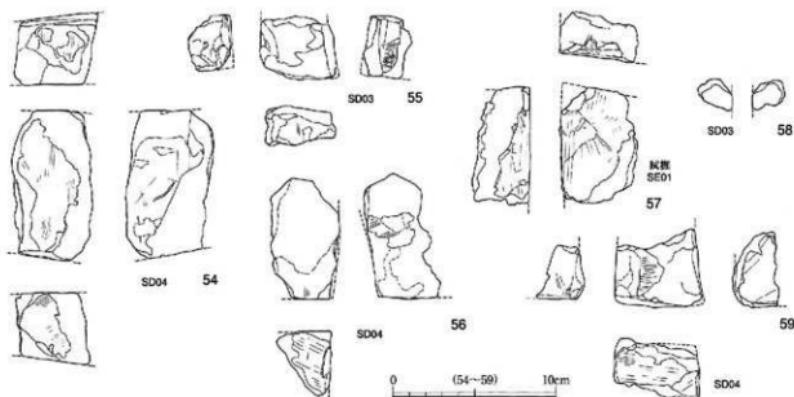


第25図 陶磁器実測図(1/3) 35-38-44: SD03, 36-39: 試掘、37: SD01(試掘)、40~43-45-46: SD02

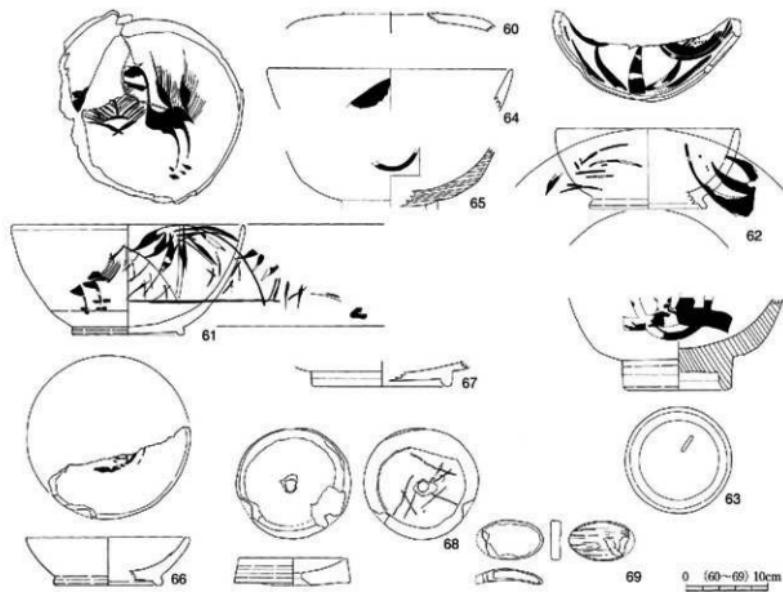


第26図 石製品実測図

1525～1550年頃とみられる。願海寺城主寺崎氏が文献に現れるのは天文21（1552）年から天正9（1581）年までである。天文年間の史料については明確ではないが、それ以前から願海寺城跡を本拠として居を構えていたとすれば、B種土師器の年代がそれに相当する。



第27図 塚実測図(1/3)



第28図 漆器実測図(1/3) 62・68・69:SD01、64:SD03、66:SD04、61・67:SD05

天文から天正年間に相当する土師器はC種とみられるが、個体数は極少である。

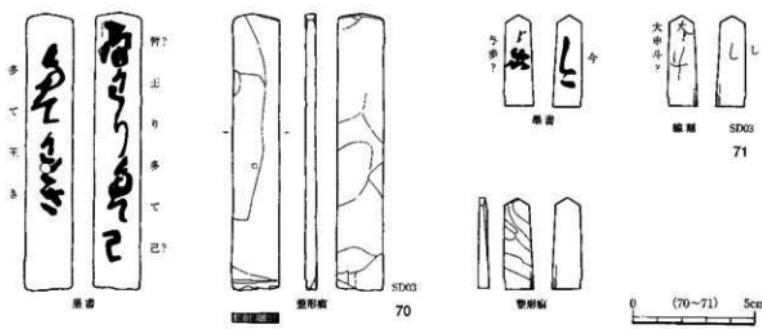
堀が埋められて整地が行われたのは、一括廃棄から暫らく後であり、寺崎氏が文献に現れる頃とみられる。

出土した木簡の内容は、範や壇に関係した戦略的な内容である可能性が高い。

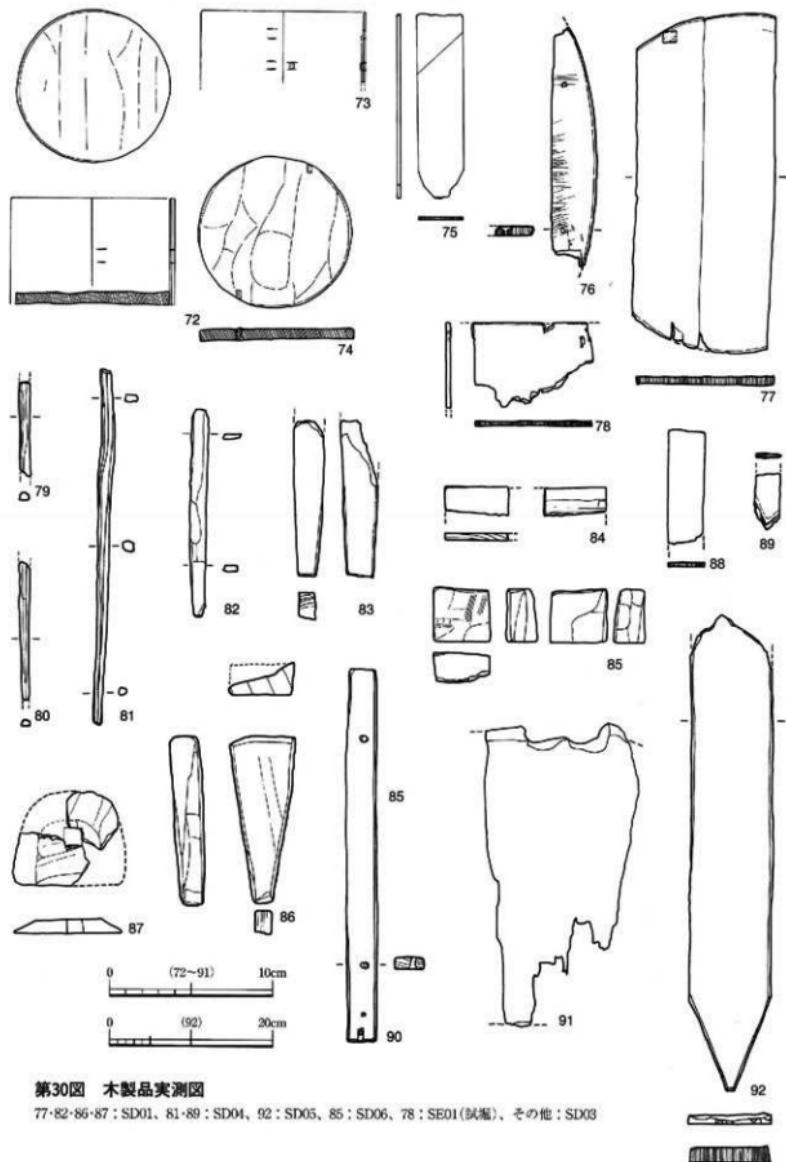
以上の検討からこの居館の内容は寺崎氏が拠った「頼海寺城」にあたる可能性が高い。今後の発掘資料の蓄積が待たれる。(漆器の解説は松澤那々子、その他は古川知明)

#### 引用・参考文献

- 石川旭丸 1975 「頼海寺城跡 上」「富山史蹟 61号」越中史蹟会  
石川旭丸 1976 「頼海寺城跡 下」「富山史蹟 62・63合併号」越中史蹟会  
石川県図書館協会 1993 『越後賀・州志(故富山県周囲)』  
宇野隆夫 1986 「越中弓庄城跡の土師器ー中世の北陸と城内ー」「人境」第10号 富山考古学会  
小杉町教育委員会 1994 「小杉町針原東遺跡発掘調査報告」  
財団法人富山県文化振興財團 1996 「梅原湖摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)」  
塙 照夫 1972 「富山県の歴史 越中の古城」北国出版社  
高岡 徹 1975 「因人寺崎氏の本拠地-頼海寺-」「富山史蹟」第61号 越中史蹟会  
高岡 徹 1980 「頼海寺城」「日本城郭大系7 新潟・富山・石川」新人物往来社  
高岡 徹 1991 「城下町の形成」「富山県指定史跡増山城跡調査報告書」小矢部市教育委員会  
高岡 徹 1997 「戦国末期の因人城下町・木舟」「砺波敷村地域研究所研究紀要」第14号 砧波市立敷村地域研究所  
高岡 徹 2002 「戦国末期における木舟城と城下町の復元研究ー因人石黒氏の盛衰と城下町の様相ー」「富山県福岡町木舟城跡発掘調査報告書ー範囲確認調査報告ー」福岡町教育委員会 p69-84  
富山県姓氏家系大辞典編纂委員会 1992 「角川日本姓氏歴史人物大辞典16 富山県姓氏家系大辞典」  
富山市教育委員会 2000 「富山県富山市東老田Ⅱ遺跡」  
野崎雅明著 富山県郷土史会校注 1974 「肯構泉達詩」KNB興業出版事業部  
福岡町教育委員会 2002 「富山駅福岡町木舟城跡発掘調査報告書ー範囲確認調査報告ー」福岡町教育委員会  
宮田進一 1997 「越中における土師器の縦年」「中・近世の北陸 考古学が語る社会史」北陸中世土器研究会  
宮田進一 1997 「越中瀬戸の変遷と分布」「中・近世の北陸 考古学が語る社会史」北陸中世土器研究会  
吉岡康暢 1984 「中世須恵器の研究」吉川弘文館

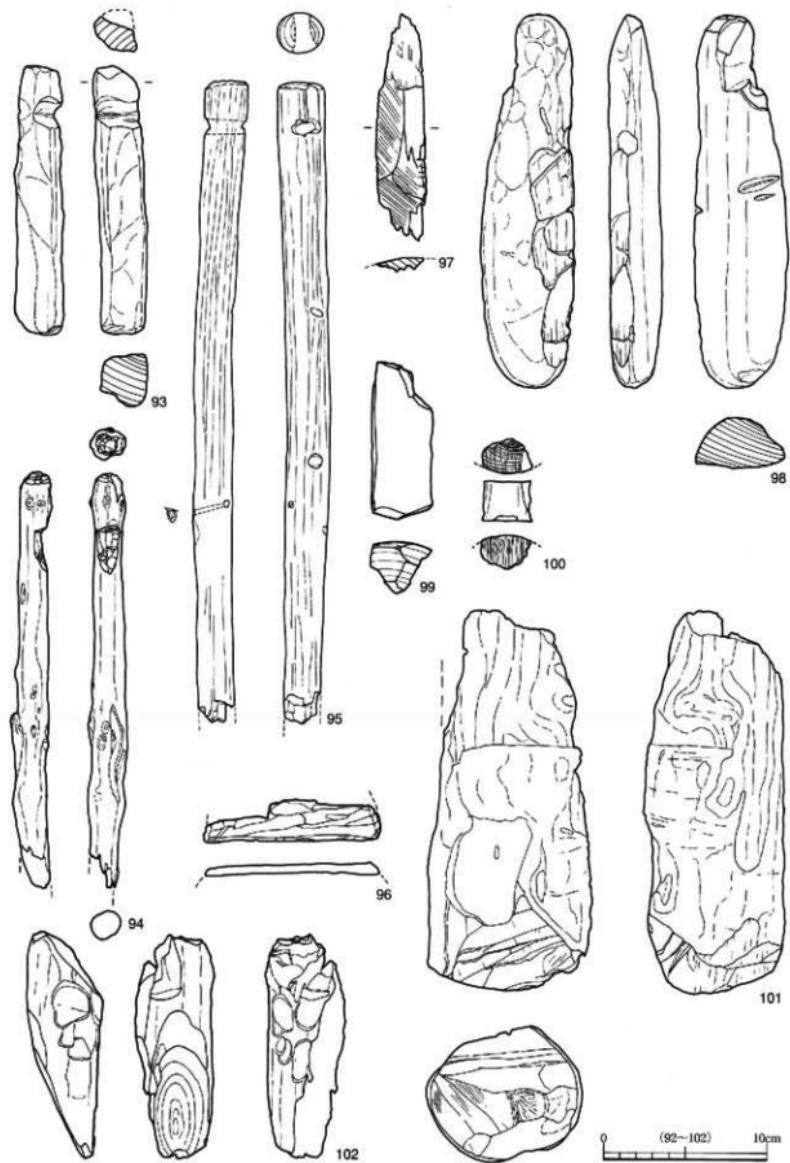


第29図 木簡(70)・将棋駒(71)実測図(1/2)

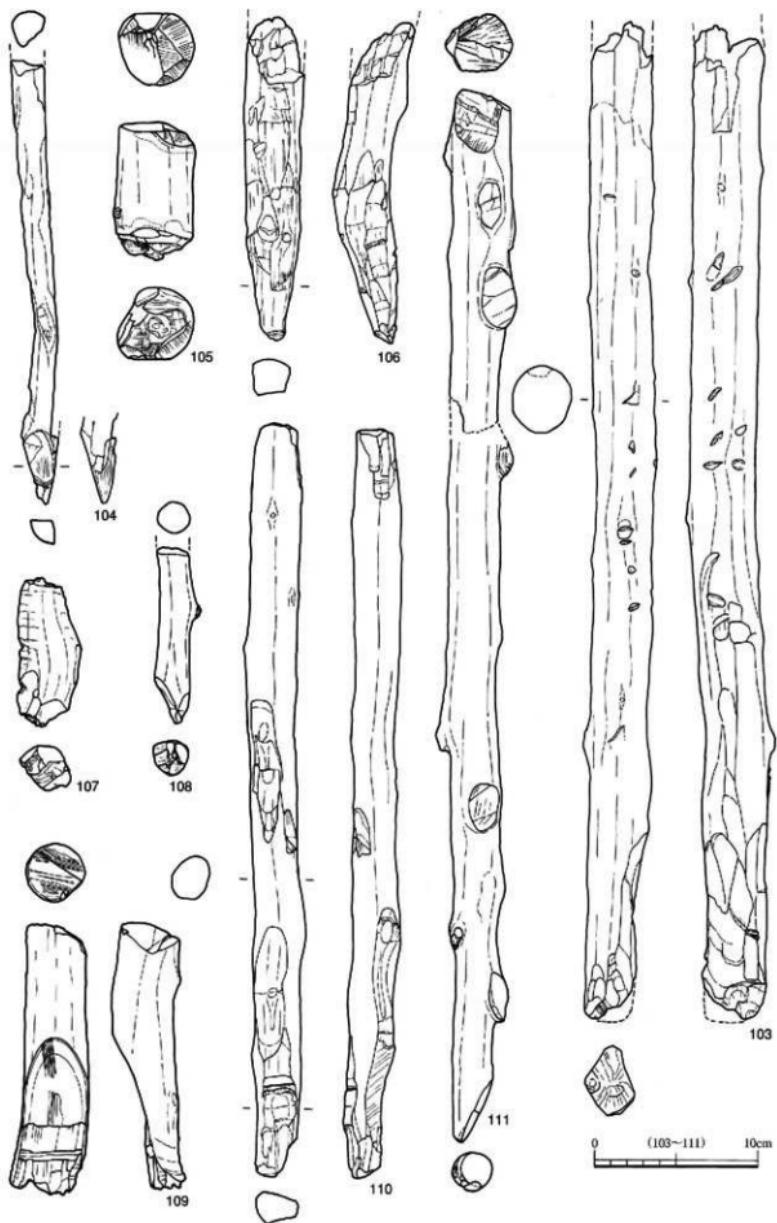


第30図 木製品実測図

77・82・86・87: SD01、81・89: SD04、92: SD05、85: SD06、78: SE01(試掘)、その他: SD03



第31図 木製品実測図(1/3) 93・94:SD06 その他:SD03



第32図 木製品実測図 (1/3) 103 · 108 : SD04 104 : SD01 106 : SE04 その他 : SD03

## 5 自然科学分析

### (1) 富山市願海寺城跡出土木製品の樹種調査結果

株吉田生物研究所

| 遺物番号 | 品名  | 樹種               | 遺物番号   | 品名       | 樹種         |
|------|-----|------------------|--------|----------|------------|
| 61   | 漆椀  | ブナ科ブナ属           | 71     | 将棋駒      | ヒノキ科アスナロ属  |
| 62   | 漆椀  | ブナ科ブナ属           | 75     | 木札       | スギ科スギ属スギ   |
| 64   | 漆椀  | スギ科スギ属スギ         | 95     | 棒状木製品    | ブナ科クリ属クリ   |
| 66   | 漆椀  | ブナ科ブナ属           | 103    | 棒状木製品    | カバノキ科ハンノキ属 |
| 67   | 漆椀  | ブナ科ブナ属           | 106    | 木杭       | カバノキ科ハンノキ属 |
| 68   | 漆椀  | ブナ科ブナ属           | 110    | 棒状木製品    | エゴノキ科エゴノキ属 |
| 69   | 漆部品 | ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ筋 | 図版14右下 | ウリ科ユウガオ属 |            |
| 70   | 木筒  | ヒノキ科アスナロ属        |        |          |            |

\*遺物番号は本文第28~37回の番号と一致する

### (2) 願海寺城跡の出土植物遺体

大成エンジニアリング株式会社

検出された植物は、堀や井戸などの水に没った場所かその近くに生育していた種類が多い。イネ科? やカヤツリグサ属・ホタルイ属などはその典型である。エゴノキやコブシなどは城の付近に生えていたと考えられる。しかし水に浸っていても井戸や堀の水位はさほど高かったとは考えられない。植物の遺体がかなり分解してしまっていて保存がよくないからである。ただ、ヒメビシの果実が採集されており、ヒシ属の仲間は水深が比較的浅いとはいえ、水面に葉を浮かべて生育している種類である。この付近では、ある程度の水位があったと推定できる。

食用として利用したと考えられる植物は、ヒメビシ、ブドウ属、モモ、コメ、ウリ?などである。ブドウの仲間の種子は個数が少ないため食料としたとは断定できない。しかしこれらは林の縁や栽培で木に巻き付けられたりしないと生育できないため、食料としての可能性はある。

コメは炭化して残っている。捨てられたものと考えられる。量は多くはない。ウリ科の種子と思われるものが1点検出されたが、保存が悪く詳しく述べられない。

ヒメビシも1点検出されたが食料にされた可能性は高い。茹でて食べるのが一般的である。(図版15参照)

第1表 遺構別出土植物遺体

| 遺構   | 種類   | 部位  | 個数 | 遺構   | 種類      | 部位  | 個数  |
|------|------|-----|----|------|---------|-----|-----|
| SD01 | エゴノキ | 種子  | 1  | SE01 | コブシ     | 種子  | 1/2 |
| SD02 | イネ科  | 炭化米 | 15 |      | ブドウ属    | 種子  | 2~3 |
|      | モミ   |     | 3  |      | イネ科     |     |     |
|      | カシ類? |     | 1  | SE03 | 不明      | 種子  | 2   |
| SD03 | カシ類? |     | 3  | SE04 | ウリ科     | 種子  | 1   |
|      | エゴノキ | 種子  | 1  |      | エゴノキ    | 種子  | 1   |
|      | ヒメビシ | 果実  | 1  |      | カヤツリグサ属 |     | 1   |
|      | モモ   | 核   | 5  |      | ホタルイ属   |     | 2   |
| SD04 | エゴノキ | 種子  | 1  |      | コメ      | 炭化米 | 3   |
| SD06 | エゴノキ | 種子  | 1  |      | ブドウ属A・B |     | 2   |
|      |      |     |    |      | ブナ属?    | 破片  | 1   |

第2表 種実遺体計測値

単位 (mm)

| 種別   | 遺傳   | 長さ    | 幅     | 厚さ   | 種別    | 遺傳 | 長さ  | 幅   | 厚さ  |
|------|------|-------|-------|------|-------|----|-----|-----|-----|
| モモ   | SD03 | 28.7  | 17.7  | 14.8 | アドウ属  |    | 3.9 | 3.8 | 3.1 |
|      |      | 24.6  | 17.8  | 13.4 |       |    | 4.1 | 3.6 | 3.1 |
|      |      | 24.3  | 17.3  | 14.2 |       |    | 3.4 | 4.5 | 2.7 |
|      |      | 22.3  | 15.4  | 12.1 |       |    | 2.9 | 3.3 | 2.0 |
| エゴノキ | SD04 | 10    | 直径4.4 |      | ホタルイ属 |    | 3.2 | 3.3 | —   |
|      | SD06 | 9.4   |       | 5.2  |       |    | 1.5 |     |     |
|      | SD01 | 11.2  |       | 4.8  |       |    | 1.4 |     |     |
|      | SD03 | 10.02 |       | 4.9  |       |    |     |     |     |
|      | SE04 | 8.15  |       | 4.5  |       |    |     |     |     |

## 炭化米について

溝SD02から検出された米粒は21点で、その内3点には糊が確認された。穀米と思われるものは無く、すべて穀である。

表に粒長・粒幅・粒厚の計測値を示した。これは現在、日本で栽培稻の分類に用いられている米粒の長さを幅で割った比（粒型）と長さと幅を乗じた積（粒の大きさ）の値を示すためである。

米粒の粒型は長さを幅で割った比で三区分される。比が1.4mm未満のものを円粒型、1.4mm以上2.0mm未満のものを短粒型、2.0mm以上のものを長粒型と区分する。これが稻の類型である。この類型で2.0mm未満から下に分布するものを日本型（ジャボニカ）、2.0mm以上をインデカ（インデカ）と区別する。

米粒のサイズ（大きさ）は長さと幅を乗じた積で表わすが、8mm未満のものを極々小粒、8mm以上12mm未満のものを極小粒、12mm以上16mm未満のものを小粒、16mm以上のものを中粒と分類する。

この分類に基づいて本遺跡の炭化米のうち、糊を除いた18点について概観すると、83.3%が短粒型で、11.1%が長粒型、残り5.5%が円粒型である。すなわちその大半は日本型（ジャボニカ）とすることが出来る。ただ、2.0mm以上値を示す2粒がインデカであるとすれば、炭化米が焼けて変形することを考慮する必要がある。粒の大きさは中粒が16.6%、小粒が38.8%、極小粒が44.4%であるが、統計資料とするには数量が少ない。

第3表 炭化米計測値

単位 (mm)

| 長さ  | 幅   | 厚さ  | 長さ／幅 |       | 長さ  | 幅   | 厚さ  | 長さ／幅 |       |
|-----|-----|-----|------|-------|-----|-----|-----|------|-------|
|     |     |     | 粒型   | 粒の大きさ |     |     |     | 粒型   | 粒の大きさ |
| 4.6 | 2.2 | 1.9 | 2.09 | 10.12 | 3.8 | 2.3 | 2.3 | 1.66 | 8.74  |
| 5.6 | 3.1 | 2.1 | 1.81 | 17.36 | 4.7 | 2.9 | 2.1 | 1.62 | 13.63 |
| 5.5 | 3.0 | 2.3 | 1.83 | 16.50 | 4.2 | 2.5 | 2.1 | 1.68 | 10.50 |
| 4.8 | 2.5 | 1.7 | 1.92 | 12.00 | 4.3 | 2.2 | 2.0 | 1.95 | 9.46  |
| 5.5 | 2.6 | 2.5 | 2.12 | 14.30 | 4.1 | 2.6 | 1.9 | 1.58 | 10.66 |
| 4.8 | 2.6 | 1.9 | 1.85 | 12.48 | 5.0 | 3.0 | 1.9 | 1.67 | 15.00 |
| 4.4 | 2.3 | 1.7 | 1.91 | 10.12 | 3.9 | 2.8 | 1.8 | 1.39 | 10.92 |
| 4.4 | 2.7 | 2.1 | 1.63 | 11.88 | 4.7 | 2.6 | 2.5 | 1.81 | 12.22 |
| 5.3 | 3.1 | 2.4 | 1.71 | 16.43 | 4.5 | 2.6 | 2.1 | 1.73 | 11.70 |
| 4.9 | 2.8 | 2.3 | 1.75 | 13.72 | 5.2 | 2.2 | 2.1 | 2.36 | 11.44 |
| 4.9 | 2.8 | 2.3 | 1.75 | 13.72 |     |     |     |      |       |

## 6 願海寺城跡出土の漆器について

松澤那々子

### (1)はじめに

願海寺城跡出土漆器について、口径と器高の相関よりも計測可能な点数が多かった高台径と高台高による相関及び文様等から年代推測を試みた。

### (2)検討内容

#### ①高台径と高台高による相関（第1～4表）

願海寺城跡出土漆器のうち、高台径と高台高の計測可能なもの（推定も含む）は椀（椀a）4点、皿1点の計5点がある。この5点を願海寺城跡出土漆器の高台径と高台高による相関図として第1表に表した。また、富山県内出土漆器との比較として、願海寺城の年代（遠藤ほか1984）と重なる第2表に15世紀末～16世紀初頭の高台径と高台高による相関図、第3表に16世紀中葉～16世紀第3四半期の高台径と高台高による相関図、第4表に16世紀第4四半期～17世紀初頭の高台径と高台高による相関図をそれぞれ用いた。

第1表を見ると、椀a・皿の両者は高台径が6～8cm内に収まる。皿については、計測可能なもののが1点であるためはっきりした事はいえないが、椀aについては、高台高1cm前後でラインが引け、二分する事が可能である。まず高台径では、第2・3・4表と比較すると、第2・3表の両者共に6～8cmの範囲を越えて椀aが分布する。第4表においては、6～8cmの範囲にちょうど収まる。次に高台高による第2表では、1.5～2cm前後でラインが引ける。第3表では、1～2cm前後でラインが引けはっきりと区別される。第4表では、1～1.5cm以内でラインが引け、やや区別し難い。

#### ②文様構成（第5～10表）

願海寺城跡出土漆器のうち文様構成が特定可能なものの（推定を含む）は、外面に鶴と植物・内面に鶴と扇（？）1点、外面に笹と植物・内面に笹と植物1点、外面に円の中に「五？」1点の計3点である。

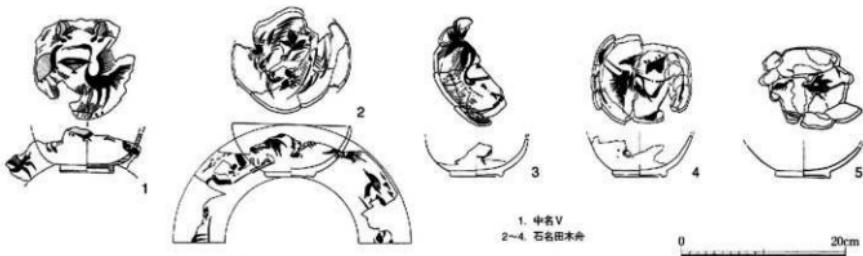
まず外面文様構成比図から見ると、16世紀中葉以降は家紋形態のものが多くなり、単独の文様だけではなく、複合文様は16世紀中葉～16世紀第3四半期がピークとなる。また内面文様構成比図からも外面文様構成と同様の事がいえる。

### (3)小結

以上より願海寺城跡出土漆器が15世紀末～16世紀初頭よりも16世紀中葉以降のものであり、なかでも高台径と高台高による相関から16世紀第4四半期～17世紀初頭の性質が強いといえる。さらに本書27ページ第28図61の漆器文様構成は、富山県内において中名V遺跡（富山県文化振興財団1999）出土のものに類似し、鶴などの筆の書き方を見ると、石名田木舟遺跡（富山県文化振興財団2002）出土漆器文様の雰囲気に類似することからも16世紀後半の漆器といえる（第33図）。

### 註

註1 椭aは口径と器高による径高指数（器高／口径 以下径高指数とする）が2／5以上のものをいう。また、径高指数により杯及び皿の数値になる場合は、身部高と腰部径の関連より腰部径／身部高（以下腰身指数とする）が0.9～1.1以内、身部高／腰部径（以下腰身指数とする）が前者と同様に0.9～1.1以内のものとする。



第33図 富士県内出土漆器 (S=1/6)

楕bは口徑指数が1/3以上2/5未満のものをいい、径高指数が皿及び楕の数値になる場合は身腰指数が1.2~2.5以内のもので腰身指数が0.3~0.9未満のものとする。また、身腰指数と腰身指数の差(身腰指數-腰身指數)が1.8以内となるものをいう。

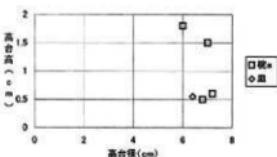
皿は口径指数が1/3未満のものをいい、楕a・楕bと同様に規定の数値以外のものは、身腰指數が2.6~4.0のもので腰身指數が0.0~0.2のものとする。また、身腰指數と腰身指數の差が1.8を超えるものをいう。

註2 本稿における漆器の時期設定は、[松澤那々子 2002]で漆器の器形変化から分類したものを使用している。

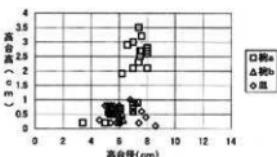
## 参考文献

- 伊丹まさか 1993「楕、皿における漆絵の文様集成」『佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地)発掘調査報告書』第2分冊 佐助ヶ谷遺跡発掘調査団p329~p372
- 遠藤幸一・金龍教英・高岡徹 1984「頬海寺」「富山県史」通史編Ⅱ 中世 富山県p1164~p1166
- 大野淳也・片岡英子 1997「越中の様相」「北陸の漆器考古学—中世とその前後—」第1分冊 北陸中世土器研究会p113~p122
- 久々忠義 1986「富士県内出土の漆器について」「大境」第10号 富山考古学会p121~p150
- 財団法人富士県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1999「埋蔵文化財調査概報—平成10年度—」
- 財団法人富士県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2002「石名木舟遺跡発掘調査報告」第2分冊
- 小学校辞典編集部編 1987「文様の手帖」小学校
- 高橋真実 2001「第3節 井口村蛇喰正覚寺遺跡出土の漆楕の文様について」「県営組手育成基盤整備事業(区画整理型)蛇喰地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 富士県井口村 蛇喰正覚寺遺跡2」井口村教育委員会p35
- 松澤那々子 2002「中・近世における越中漆器の様相—漆器編年の一再検討—」
- 北陸中世土器研究会 1997「北陸の漆器考古学—中世とその前後—」第1分冊
- 四柳嘉章 1997「北陸の漆器考古学—中世とその前後—」「北陸の漆器考古学—中世とその前後」第1分冊 北陸中世土器研究会p1~p41

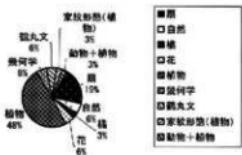
第1表 須海寺城跡出土漆器の高台径と高台高による相関図



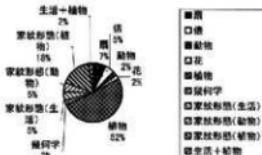
第3表 16世紀中葉～16世紀第3四半期の高台径と高台高による相関図



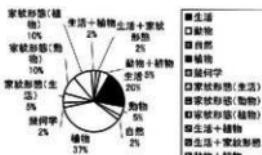
第5表 15世紀末～16世紀初頭における外面文様構成比



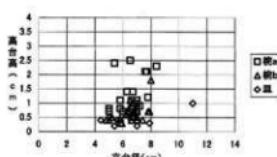
第7表 16世紀第4四半期～17世紀初頭における外面文様構成比



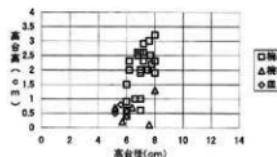
第9表 16世紀中葉～16世紀第3四半期における内面文様構成比



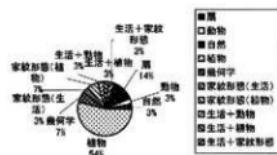
第2表 15世紀末～16世紀前葉の高台径と高台高による相関図



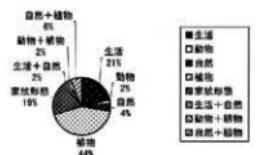
第4表 16世紀第4四半期～17世紀初頭の高台径と高台高による相関図



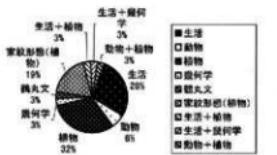
第6表 16世紀中葉～16世紀第3四半期における外面文様構成比



第8表 15世紀末～16世紀初頭における内面文様構成比



第10表 16世紀第4四半期～17世紀初頭における内面文様構成比



## 7 願海寺城跡出土の将棋駒について

増川 宏一

遊戯史学会会長・将棋博物館顧問

将棋は10世紀後半に日本に伝えられたと推定され、現在のところ最古の出土駒は奈良興福寺の旧境内跡から11世紀中頃の複数の駒が出土している。将棋は伝来後、改良されながら幾つかの型が並存し、16世紀には現行の型の将棋とやや大型の中将棋が定着していた。地方によって普及の程度に差異があるものの全国的に各階層に将棋は愛好され、大衆的な盤上遊戯の一つに数えられるようになっていた。

京都の文化的影響をうけている北陸地方の西部では将棋が盛んで、一乗谷遺跡から多量の将棋駒が発掘されていることは広く知られている。地理的に比較的近い願海寺城跡から将棋駒が出土したことは当然といえる。

今回出土した将棋駒は城郭に沿った堀跡から発見された一枚であるが、将棋駒が単独で使用されることはない、一組のうちで紛失したものか、何等かの理由で廃棄されたものであろう。この駒を観察すると以下のように判断できる。

1. 駒の側面から見た厚みは、尖った先端部と底部までがほぼ同じ厚みであり、後の江戸期の駒にみられるように、先端部が薄く底部がより厚い形とは異なっている。しかし、外形は先端部から底部に向けて僅かながら巾が広くなっている。前述の興福寺境内跡から出土した駒は、先端部と底部の巾がほぼ同じであることから、五角形のいわゆる駒形が規範化される中間の段階であり、戦国期の駒の形状を示している。

2. 駒の字はやや崩れた書体で「兵」と中央部に墨書きされている。しかし、その上部右半分に不鮮明な墨書きが見え、「与」かあるいは他の文字と判読できる。もし「与」と読めるならば、「歩」の崩し字の上部の部分は「与」に類似した形状である。「歩」の崩し字の一部分が残っているとするならば、下の字とあわせて「歩兵」と判断できる。将棋の駒の中で最も多い「歩兵」が表面に墨書きされていると断定して間違いないであろう。

3. 駒の裏面の墨書きは平仮名の「と」のように見えるが、明らかに「今」の崩し字であろう。「と」の筆順の最初は左上から右下方向にかけてであるが、裏面の字の筆順は右上から左下の方向であり「今」の崩し字の典型である。

「今」と書かれている理由は、中世から近世にかけて同音の場合は屡々当て字が用いられているからで、例えば、能楽師として著名な金春大夫は今春大夫と記されている場合が少なくない。したがって「歩兵」の駒の裏は通常「金」または「金将」であるが、「金」の代わりに「今」と書いたと判断できる。「今」と書かれた出土駒は一乗谷遺跡出土の駒をはじめ他にも例がみられる。

4. 今回の出土駒で異例のことは、駒の表裏ともに線刻がなされていることである。

駒の裏面は平仮名の「し」のように見える線刻であるが、墨書きの「今」の上部とかなり近接しているので、墨書きの部分をなぞったように思える。ただ、「今」の上部の一部のみで、もし駒の字をなぞったのであれば、何故途中で中止したのか不可解である。

なお、16世紀には既に彫り駒が用いられたと推定できる。一乗谷遺跡からの出土駒のうち、甚だ少数であるが彫り駒とみなされる複数の駒がある。彫り駒は駒の字を彫ってその跡に墨を入れ、駒の字の摩耗を防ぐためのものであるが、願海寺城でも使用した駒を彫り

駒にしようと試みた可能性は大きい。

5. しかし、表面の「歩兵」と記された箇所の線刻の判断はきわめて困難である。

…見ると線刻は三文字とみなされるが、二文字目が小さく、上部の「大」とみなされる字と近接しているので、或いは二文字かもしれない。三文字とみると、無論他の読み方も可能であろうが、「大口（部）斗」または「大申斗」と読むことができる。ただこれが何を意味しているのか不明である。最上部の線刻は「大」であることはほぼ確実であろう。

6. 最上部が「大」の一文字ではなく、「大」と組み合わされた文字で、しかも将棋の駒の名称と仮定するならば、中将棋の駒の名称に「奔王」と「奔猪」がある。中将棋は14世紀に考案された将棋で、16世紀にも公家や僧侶及び上級の武将に愛好されていた。駒目の数は $12 \times 12$ で、駒数は敵味方合計して92枚のかなりの大型の将棋である。相手から奪った駒は再使用できない取り捨てのルールであった。

しかし、線刻の上部の字を「奔」だと読むのは甚だ困難で、下部の「斗」のように見える字と繋ぎ合わせても「奔王」と読むには躊躇せざるをえない。なお、「奔王」は成らない駒なので裏面は空白であり、裏面の「今」の字あるいは裏面の線刻との整合性を欠いている。また、「奔猪」は「横行」という駒が成った時の駒である。「奔猪」と読むのも困難であり、裏面は「横行」でなければならないが「今」及び「今」をなぞった部分とも合致しない。それ故、線刻は中将棋の駒の名称とは考えられない。

7. 「歩兵」の駒の線刻の下部は、「兵」の字とかなり重なりっている。したがって、線刻の下部は、裏面の「今」をなぞったのと同様に、「兵」の字をなぞった可能性もすてきれない。もし表面の線刻の下部が「兵」の字に沿って彫られたか、彫ろうと試みたものであるならば、上部の線刻の「大」あるいは「大」と組みあわさった文字は、独自の別の意味をもつかもしれない。

8. 表面の線刻の上部は、駒の文字よりもかけ離れた駒形全体の上部に刻まれている。これは線刻の下部の「兵」をなぞったものと切り離して別の意味をもつものと考えるならば「大口（部）」または「大申」或いは上部に「大」のある一字と読むことができる。詳しく観察すると「大」（のように見える文字）の先端に墨を入れた部分があるので、意図的に線刻したと考えられる。

意味不明の線刻であるが、可能性として駒の所有者の名前か、収納された場所を示していたとも考えられる。いずれにしても正確な判断は困難である。

以上甚だ不明確な判断であるが、駒は「歩兵」で、裏面は「今」であることは間違いないと判断できる。なお、この駒が中将棋の駒であるのか、当時少将棋と呼ばれた現行の将棋の駒かは判断できず、今後新たな将棋駒の発掘により判断出来、もし他にも線刻された駒が出土するならば、より正確な把握が可能になるであろう。

## 参考文献

- 増川宏一 1977 『ものと人間の文化史23-I 将棋I』法政大学出版局  
増川宏一 1985 『ものと人間の文化史23-II 将棋II』法政大学出版局  
増川宏一 1995 『平凡社ライブラリー-119 慕打ち・将棋指しの誕生』平凡社

### III 北代遺跡

#### 1 遺跡の位置

北代遺跡は、富山市街地から西方約3kmの富山市長岡地区に所在する。

呉羽山丘陵の北～北西部は長岡台地と呼ばれる平坦面が広がり、開析による多くの舌状台地が形成されている。遺跡はその台地のほぼ中央部に位置し、標高17mを測る。北側と南側には大きな開析谷が形成されている。

#### 2 調査の経過

##### (1)調査に至るまで

遺跡は明治40年、北陸地方の遺跡遺物調査のために富山県を訪ねた、吉田文俊によって発見された（斎藤1981）。その後も早川莊作（早川1962）、森秀雄（森1951）、西井龍儀、藤田富士夫（西井・藤田1976）などにより出土遺物の報告がなされ、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、奈良～平安時代にわたる遺跡として知られるようになった。

昭和53年に富山市教委が遺跡範囲確認調査を実施し、東西280m、南北200mの範囲内に住居跡46棟、土坑数箇所を確認し、その結果、北陸地方を代表する縄文遺跡として1,215m<sup>2</sup>が昭和59年1月に国の史跡に指定された。

平成8～10年度には、指定地と周辺地を含めて約15,000m<sup>2</sup>の復元整備を文化庁の史跡等活用特別事業（ふるさと歴史の広場整備事業）で行い、整備に先立つ発掘調査では新たに竪穴住居跡30棟と掘立柱建物4棟を検出した（富山市教委1997・1998・1999）。復元整備されたユニークな土屋根の竪穴住居群と高床建物は発掘調査の成果によるものである。平成11年4月に「富山市北代縄文広場」としてオープンした。

##### (2)調査の経過

平成14年度に予定された指定地周辺における緑化工事にあたり、植栽工事部分（サザンカ生垣）について試掘確認調査を行った（第36図）。

調査は平成14年10月1日～17日（延べ11日間）に実施した。調査面積は16m<sup>2</sup>である。

#### 3 調査の成果

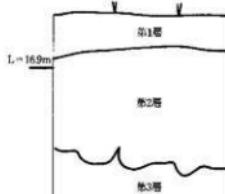
##### (1)基本層序（第34図）

基本土層は、調査区の西壁で確認した。第1層は耕作土（厚さ約20cm）。第2層は暗褐色土（厚さ50～80cm）で、凹凸が激しく、しまらない。第3層浅黄色粘質土となるこの面の上面で遺構を検出した。地山は、南から北にかけて緩やかに傾斜している。遺物包含層は後世の耕作のため存在しない。

##### (2)遺構と遺物（第35図、図版16）

竪穴住居跡2棟とピット数基を検出した。竪穴住居跡は從来の調査で76棟を確認しており、今回の調査で検出された竪穴住居跡は、第77号、第78号と称することとする。

**第77号竪穴住居** 調査区の北端で住居の一部を検出した。確認面から床面までの深さ15cmを測る。住居内施設として、厚さ約10cmの貼床と2基の土坑がある。貼床は3層構造と考えられる。下から、淡黄色土（厚さ5cm）、暗褐色土（厚さ2cm）、黄橙色土（厚さ3cm）



の順番に土を敷き、これらは非常固く叩きしめてあった。

住居の覆土内と土坑内（SK01・SK02）からは、縄文土器・石器（打製石斧・磨製石斧・凹石・磨石・石錐）・炭化物・骨が出土した。土坑から出土した土器は串田新式に比定される。SK01では波状と平線の深鉢口縁部がある。平線の深鉢は沈線で工字に区画され、貝殻腹縁での押圧が施される。SK02も平線の深鉢口縁部がある。沈線が3条施され、区画内には貝殻腹縁での押圧がなされる。住居の時期は中期後葉である。

**第78号竪穴住居跡** 調査区の南端で住居跡の一部を検出した。掘り込みは確認できていないが、硬化した貼床を確認したため、住居跡と判断した。

住居跡部分からは縄文土器と石器（石錐）が出土した。土器は平線の深鉢口縁部があり、沈線が施され貝殻腹縁で押圧される。串田新式に比定される。住居の時期は中期後葉である。

住居跡以外からは、縄文土器・石錐・磨石（朱が付着する）被熱碟・須恵器・土師器・内黒土器・近世陶磁器が出土した。

#### 4 小結

今回の調査では、中期後葉（串田新式）の竪穴住居跡2棟などを確認した。中期後葉は本遺跡が最も繁栄した時期でそれをさらに裏付けることとなった。

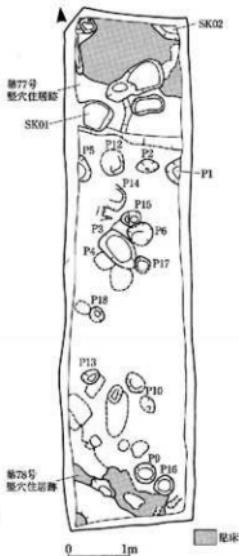
集落構造については、集落の中央部に掘立柱建物があり、それを取り囲むように竪穴住居が配置される。

竪穴住居が円環状に配置されるか、弧状に南北のブロックに区分されるかの二つの形態が想定されている（富山市教委1999）。

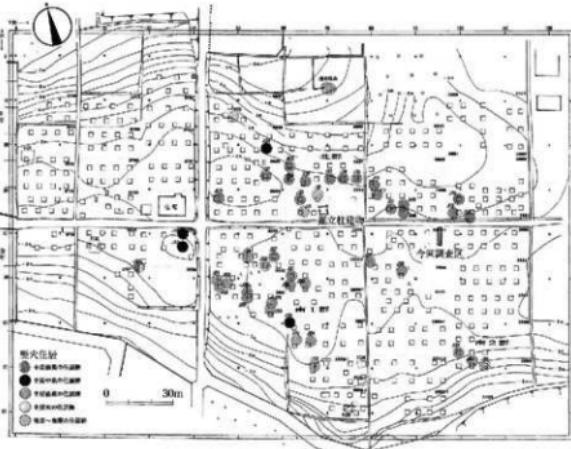
今回検出した住居跡は、円環状の形態ではその範囲内に存在し、ブロック形態であれば、北群に属することになる。

（堀沢祐一）

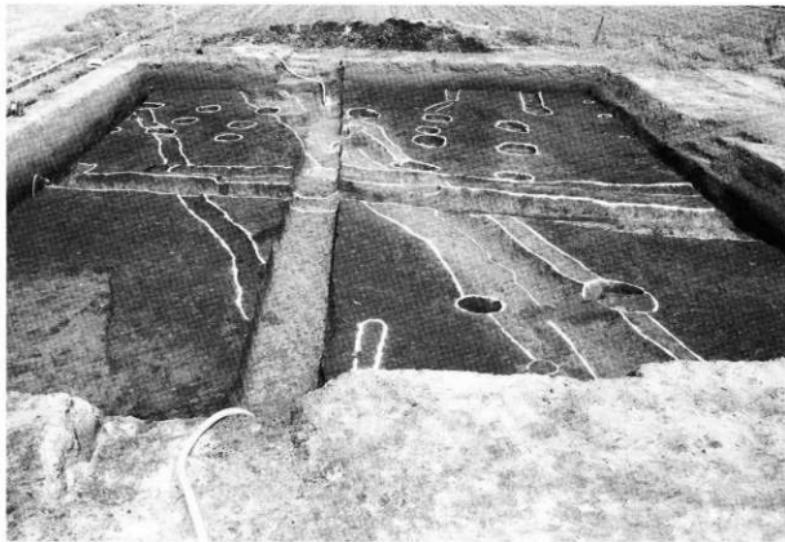
\*参考文献はP58



第35図 遺構配置図（1：80）



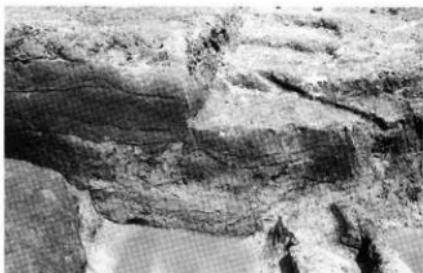
第36図 今回の調査位置と竪穴住居・掘立柱建物配置図



上層造構完掘状況（西から）



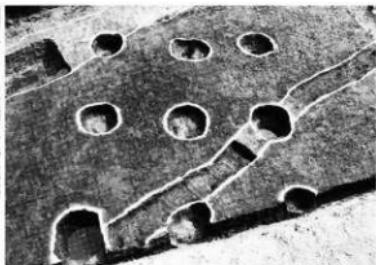
SD01土師器鍋出土状況（南から）



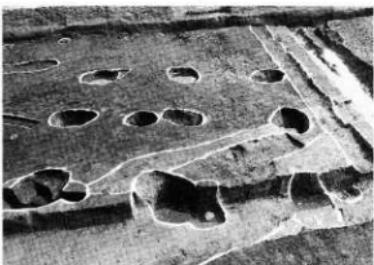
SD03土層断面（調査区東壁）



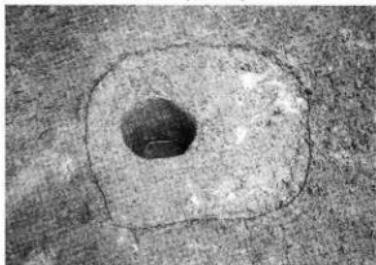
SD01・SD02完掘状況（南から）



SB01 (北から)



SB02 (北から)



SB01-P09柱痕及び掘方検出状況



SB01-P13柱根出土状況 (北から)



SB02-P16土層断面 (東から)



SB02-P17遺物出土状況 (北から)



SK04木製品出土状況 (南から)



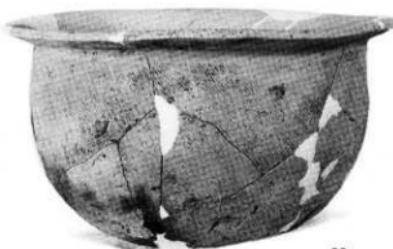
SK05土層断面 (調査区西壁)



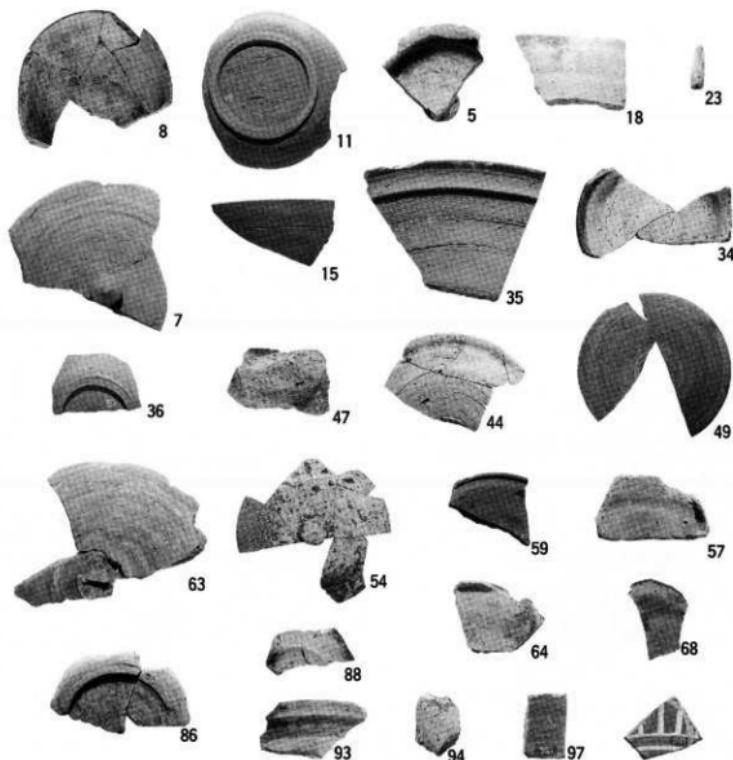
下層遺物包含層出土弥生土器（約1/4）



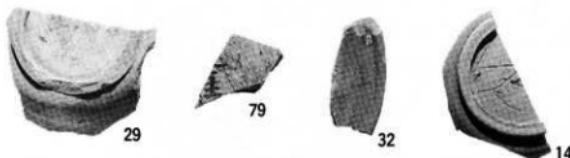
上層・下層遺物包含層出土弥生土器（約1/4）



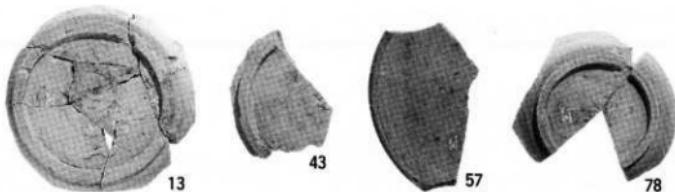
SD01出土土師器鍋（約1/4）



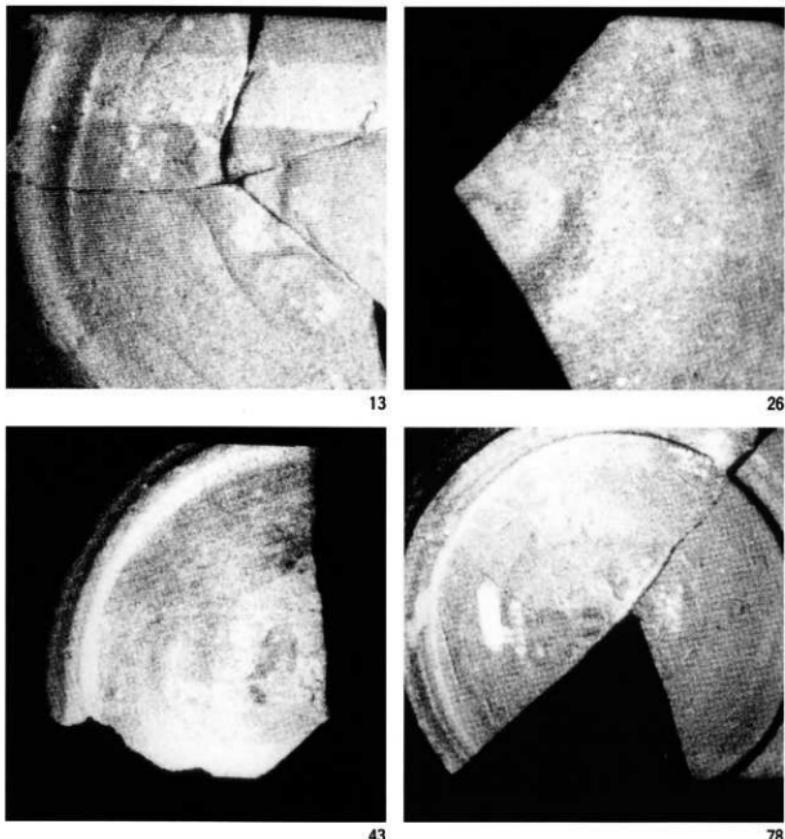
上層遺構・上層遺物包含層出土遺物（約1/4）



墨書・刻書土器（約1/3）



墨書・墨痕のある土器 (1/3)



赤外線写真



2



1 試掘確認調査状況（北から）  
2 調査区全景（東から）  
3 調査区全景（北から）  
4 調査地近景（北西から）



3



4



SD03（西から）



SD05漆椀出土状況



SD03土師器皿・棒出土状況



SD03曲物出土状況



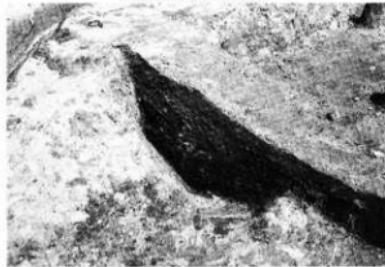
SD03将棋駒出土状況



SD03木簡出土状況



SD01石垣状況（南東から）



SD01土層（西から）



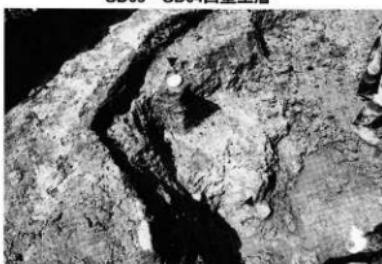
SD04西壁土層



SD03・SD04西壁土層



SD04土層（北西から）



SD04東端部土師器皿出土状況（北西から）



SD06土層（南西から）



SE03整地層検出状況（南西から）



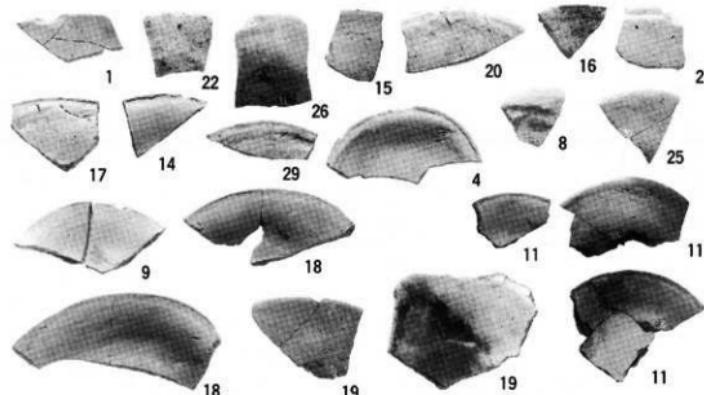
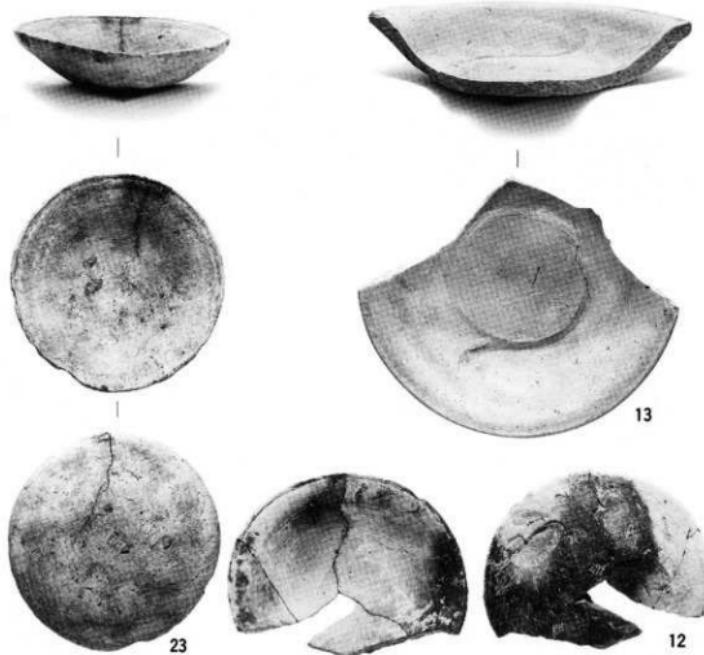
SE03土層（南西から）



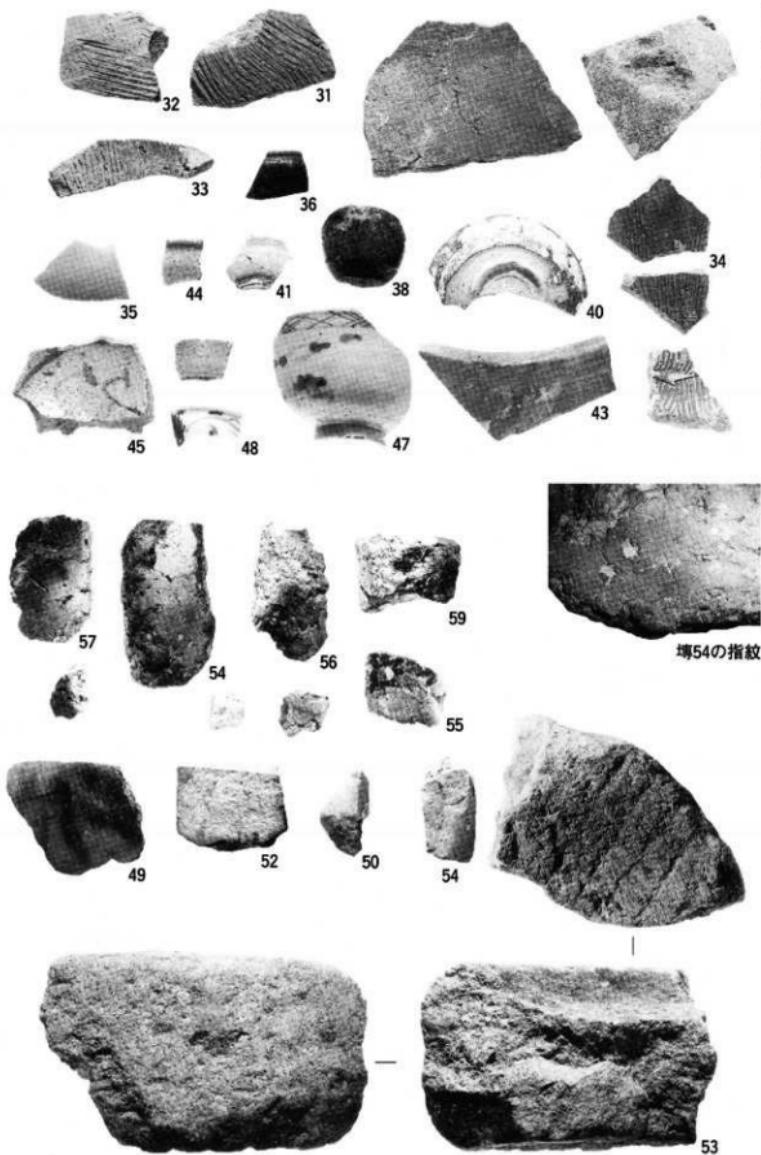
SE04検出状況（西から）



戦国時代土器



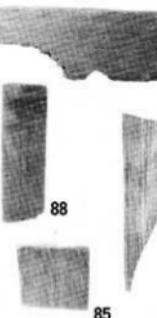
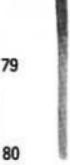
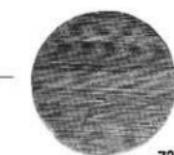
戰國時代土師器



中～近世陶磁器・磚・石製品

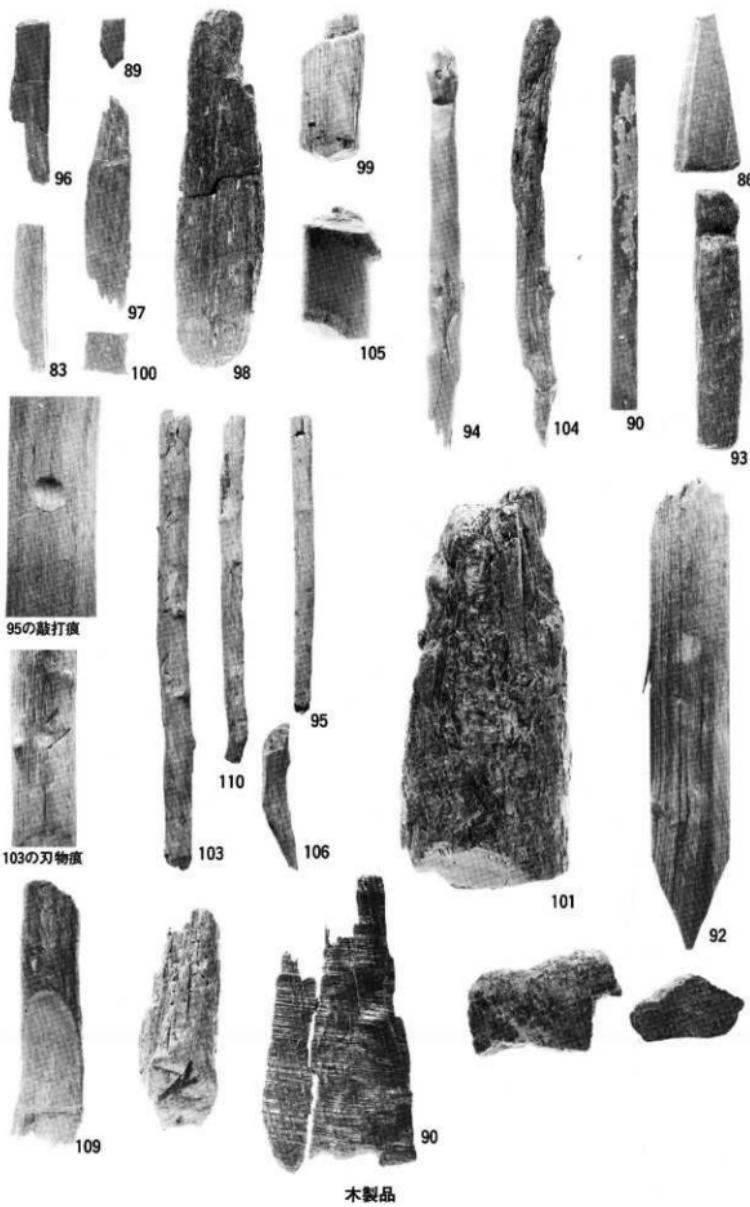


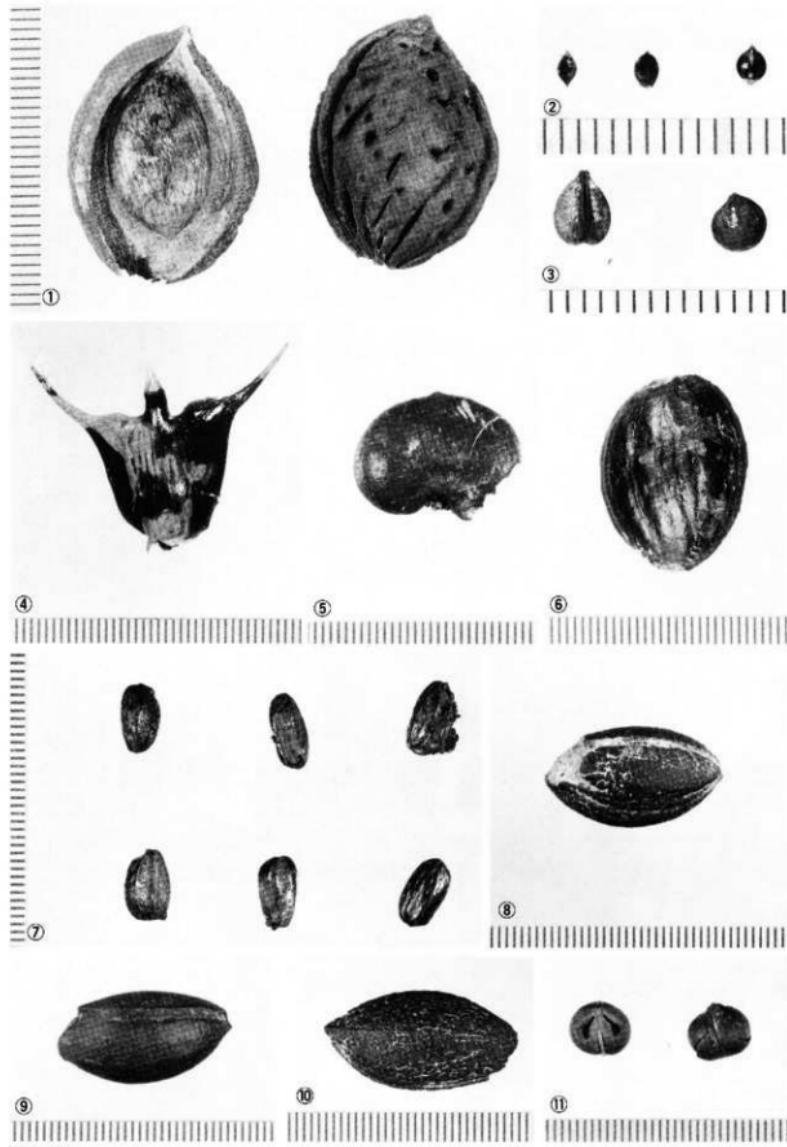
漆 器



木製品

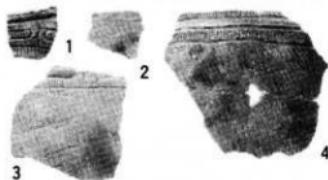
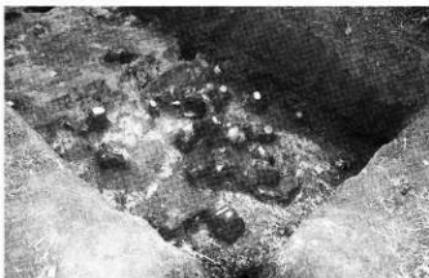
図版  
14  
願海寺城跡





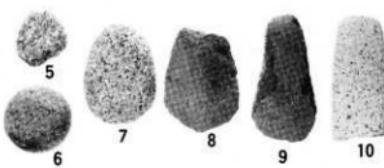
種実遺体

- ①単16モモ核 ②土壤1カヤツリグサ属・ホタルイ属 ③土壤1ブドウ属A・B ④単9ヒメビシ果実  
 ⑤単14コブシ種子 ⑥単4カシ類 ⑦単1コメ炭化米 ⑧単7エゴノキ種子 ⑨単2エゴノキ種子  
 ⑩単6エゴノキ種子 ⑪単15ブドウ属種子 (図中線間1mm)



1・4, SK01出土  
2・3, SK02出土

第77号竪穴住居内SK出土縄文土器（中期後葉）



第77号竪穴住居出土土器 5.石錘 6.凹石 7.磨石  
8・9.打製石斧 10.磨製石斧

## 報告書抄録

| ふりがな          | とやましないいせきはくつちょうさかいよう・こ                  |                    |                   |  |  |                        |                |
|---------------|---|--------------------|-------------------|--|--|------------------------|----------------|
| 番名            | 富山市内遺跡発掘調査概要V                           |                    |                   |  |  |                        |                |
| 調査名           | 水橋二杉遺跡、額海寺城跡、北代遺跡                       |                    |                   |  |  |                        |                |
| シリーズ名         | 富山市埋蔵文化財調査報告                            |                    |                   |  |  |                        |                |
| シリーズ番号        | 129                                     |                    |                   |  |  |                        |                |
| 権利者名          | 古川知明・福沢祐一・安達志津                          |                    |                   |  |  |                        |                |
| 編集機関          | 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター                      |                    |                   |  |  |                        |                |
| 所在地           | 〒930-0803 富山市下新本町5番12号 TEL.076-412-4246 |                    |                   |  |  |                        |                |
| 発行年月日         | 西暦2003年3月28日                            |                    |                   |  |  |                        |                |
| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地                             | コード<br>市町村<br>遺跡番号 | 北緯<br>度<br>分<br>秒 | 東經<br>度<br>分<br>秒  | 調査期間   | 調査面積<br>m <sup>2</sup> | 調査原因           |
| 水橋二杉遺跡        | 富山市水橋二丁目                                | 16201 217          | 36度<br>42分<br>50秒 | 137度<br>17分<br>10秒   | 20020624<br>~20020731  | 179                    | 個人住宅建築         |
| 額海寺城跡         | 富山市額海寺字諏本                               | 16201 066          | 36度<br>42分<br>50秒 | 137度<br>09分<br>40秒   | 20020808<br>~20020902  | 90                     |                |
| 北代遺跡          | 富山市北代字大畑                                | 16201 125          | 36度<br>42分<br>50秒 | 137度<br>11分<br>20秒   | 20021001<br>~20021017  | 16                     | 北代城文広場<br>綠化工事 |
| 所収遺跡名         | 種別                                      | 主な時代               | 主な遺構              | 主な遺物   | 特記事項   |                        |                |
| 水橋二杉遺跡        | 集落跡                                     | 縄文                 |                   | 縄文土器（後～晚期）   | 柱立往跡物は奈良期で<br>能柱遺物。食糞とみられる。<br>墨書「巫（則天文字）」、<br>刻書「女」のある須恵器<br>が出土。                           |                        |                |
|               |   | 弥生                 |                   | 弥生土器（中期～末）   |  |                        |                |
|               |   | 秦良・平安              | 溝、獨立柱建物、<br>土坑    | 須恵器、土師器、桂板、<br>板、土鍬、ふいご羽口  |  |                        |                |
|               |   | 中世                 |                   | 土師器、珠紋鏡  |  |                        |                |
|               |   | 江戸                 |                   | 陶磁器  |  |                        |                |
| 額海寺城跡         | 城郭跡                                     | 室町～戦国              | 堀、上構、井戸跡          | 土師器、珠洲、越前、<br>青磁、瀬戸美濃、漆器、<br>木簡、将棋駒、杭等各<br>種木製品、砥石、石臼、<br>壇      | 文献資料にみる天文～<br>天文正年間の額海寺城か。<br>整地跡及び堀跡への一<br>括発掘を確認。<br>木簡は表に「たてわき」、<br>裏に「暫？わりたて？」<br>の文字あり。 |                        |                |
|               |   | 江戸                 | 溝                 | 越中瀬戸、肥前  |  |                        |                |
| 北代遺跡          | 集落跡                                     | 縄文（中期）             | 竪穴住居2棟、<br>土坑     | 縄文土器、打製石斧、<br>磨製石斧、凹石、磨石、<br>石鍬、炭化物、骨、須<br>恵器、土師器、内黒土<br>器、近世陶磁器 | 北代遺跡の竪穴住居は<br>78棟となった。   |                        |                |

### III 北代遺跡参考文献

- 齊藤 隆 1981「北代遺跡と古田文後」『富山市考古資料館報』No.5 富山市考古資料館
- 富山市教育委員会 1997「史跡北代遺跡発掘調査概要—ふるさと歴史の広場事業に伴う縄文中期集落の発掘調査一」
- 富山市教育委員会 1998「史跡北代遺跡発掘調査概要II—ふるさと歴史の広場事業に伴う縄文中期集落の発掘調査二」
- 富山市教育委員会 1999「史跡北代遺跡ふるさと歴史の広場整備事業報告書」
- 西井龍惟・藤田富士夫 1976「飛羽山丘陵周辺の先土器・縄文時代草創期の遺跡について」『人境』第6号 富山考古学会
- 早川莊作 1962「富山縣の石器と土器」清明堂
- 森 秀雄 1951「人骨の富山県」清明堂

富山市埋蔵文化財調査報告129

**富山市内遺跡発掘調査概要V**

-水橋二杉遺跡・願海寺城跡・北代遺跡-

2003(平成15)年3月28日発行

発行  
編集

富山市教育委員会

富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0803

富山市下新本町5番12号

Tel 076-442-4246

Fax 076-442-5810

E-mail : maizoubunka-01@city.toyama.toyama.jp

印刷

富山スガキ株式会社

